秋田県文化財調査報告書第194集

# 五百刈田遺跡発掘調查報告書

――県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

松胃果理蔵文化財也必

1990.3

秋田県教育委員会

## 五百刈田遺跡発掘調查報告書

――県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る埋蔵文化財発掘調査――

1990.3

秋田県教育委員会

秋田県には、私達の祖先が営々として築きあげてきた貴重な文化 遺産が数多く残されています。これらは保護し未来に継承していく べきものであります。

このほど秋田県土木部により県道協和・松ヶ崎線の道路改良が計画され、路線内に五百刈田遺跡の一部が含まれることが判明しましたので、工事に先立って発掘調査を実施いたしました。

その結果、縄文時代の竪穴住居跡や土坑とともに土器、石器が多数検出されました。

本報告書はその調査成果をまとめたものであります。本書を地域の歴史研究と、埋蔵文化財に対する御理解と保護のために役立てていただければ幸いです。

最後に、本調査の実施及び本書の刊行にあたり御援助、御協力を 賜りました秋田県土木部仙北土木事務所、協和町教育委員会をはじ め関係各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成2年3月15日

秋田県教育委員会 教育長 橋本 顕信

## 例 言

- 1. 本報告書は、県道協和・松ヶ崎線緊急地方道路整備工事に係る五百刈田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2. 本書の執筆は埋蔵文化財センター学芸主事 谷地薫が行った。
- 3. 本書に掲載した地形図は国土地理院発行5万分の1『刈和野』図幅及び仙北土木事務所提供の1千分の1地形図である。
- 4. 土色の表記は、農林水産省農林水産技術会議監修 財団法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準土色帖』に拠った。
- 5. 遺構番号は、その種類ごとに記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後で検討の結果、 遺構ではないと判断したものは欠番とした。
- 6. 発掘調査および遺物整理にあたって、山形県教育庁文化課阿部明彦氏、秋田県立博物館石 川恵美子氏、福島県文化センター能登谷宣康氏の御指導・御助言を賜った。記して感謝の意 を表する次第である。

## 凡 例

- 各遺構・遺物に付している略記号は以下のとおりである。
  竪穴住居跡……SI 土坑……SK 焼土遺構……SN
- 2. 挿図中の遺物実測図と拓本はすべて通し番号とした。
- 3. 表中の法量の推定値は()で表示した。
- 4. 挿図中のスクリーン・トーン、シンボルマークは以下のように使い分けた。



## 目 次

序				
例言•凡例				
目次・挿図目次・	表目次・図版目次			
第1章 はじめに				1
第1節 調査	に至るまで			1
第2節 調査	の組織と構成			1
第2章 遺跡の立	地と環境			2
第1節 遺跡	の位置と立地			2
第2節 歷史	的環境			2
第3章 発掘調査	の概要			5
第1節 遺跡	の概観			5
第2節 調査	の方法			5
第3節 調査	経過			6
第4章 調査の記	録			10
第1節 検出	遺構と遺物			10
第2節 遺構	外の出土遺物			17
第5章 まとめ …		·····		47
	挿	図目次		
第1図 遺跡位置	図;	3 第10図	SK02土坑と出土遺物	15
第2図 遺跡周辺	地形区分図;	3 第11図	S K06土坑、S K08土坑と	
第3図 周辺遺跡	分布図	4 E	出土遺物、SN04焼土遺構	16
第4図 調査範囲	図	7 第12図	遺構外出土土器(1)	19
第5図 遺構配置	<b>X</b>	8 第13図	遺構外出土土器(2)	20
第6図 基本土層	図	9 第14図	遺構外出土土器(3)	21
第7図 SI05竪	穴住居跡	1 第15図	遺構外出土土器(4)	23
第8図 SI05竪	穴住居跡遺物出土	第16図	遺構外出土土器(5)	24
状況、出土	土器 1	2 第17図	遺構外出土土器(6)	25
第9図 SI05竪	穴住居跡出土石器 1	3 第18図	遺構外出土石器(1)	27

第19図	遺植	<b>觜</b> 外出土石器(2) ······ 29	第27図	遺構	外出土石器(10) 39			
第20図	遺植	<b>觜</b> 外出土石器(3) ····· 30	第28図	遺構	外出土石器(11) 41			
第21図	遺植	<b>觜</b> 外出土石器(4) 31	第29図	遺構	外出土石器(12) … 42			
第22図	遺構外出土石器(5)33		第30図	土器	出土分布図 44			
第23図	遺構外出土石器(6)35		第31図	箆状石器、石錘出土分布図				
第24図	遺構	<b>觜</b> 外出土石器(7) ······ 36	第32図	石器	類組成図 45			
第25図	遺桿	<b>觜</b> 外出土石器(8) ······ 37	第33図	箆状石器、石錘長幅分布図 45				
第26図	遺標	<b>觜</b> 外出土石器(9) ····· 38	第34図	出土	区別石器 (Tool) 組成図 45			
		表目	次					
第1表	周辺	Q遺跡一覧表 ······ 4	第3表	出土	遺物一覧表 46			
第2表	石器	<b>器観察表 43</b>						
		図版	目次					
図版 1	1	遺跡遠景(東□西)		2	SK08土坑完掘状況			
	2	遺跡近景(南⇒北)		(	(南東⇒北西)			
図版 2	1 調査前現況(北東⇔南西)		図版 7	1	SK06土坑完掘状况			
	2 調査区全景(北東⇒南西)			(	(北東⇒南西)			
図版 3	1	1 調査区南部(北東⇔南西)		2	6 区遺物出土状況(北西⇒南東)			
	2 基本土層(南東⇒北西)		図版 8	1 1	1区遺物出土状況(北東⇒南西)			
図版 4	1 SI05竪穴住居跡精査状況			2 1	1区遺物出土状況(東➡西)			
		(北西⇒南東)	図版 9	1 à	貴構内出土遺物			
	2	S I 05竪穴住居跡完掘状況		2 ì	貴構外出土土器(1)			
		(北西⇒南東)	図版10	遺構タ	外出土土器(2)************************************			
図版 5	1	SK02土坑精査状況	図版11	遺構タ	外出土土器(3)			
		(南東⇒北西)	図版12	遺構タ	外出土石器(1)			
	2	SK02土坑完掘状況	図版13	遺構タ	小出土石器(2)			
		(南東⇒北西)	図版14	遺構タ	<b>小</b> 出土石器(3)			
図版 6	1	SK08土坑土層断面						
		(南東⇒北西)						

## 第1章 は じ め に

## 第1節 調査に至るまで

県道協和・松ヶ崎線は協和町境と本荘市松ヶ崎を結ぶ主要地方道である。協和町中淀川地内で東北横断自動車道協和インターチェンジに接続し、協和インターチェンジ、秋田空港へのアクセス道路として整備が急がれている。

この県道の改良工事計画路線内に、昭和51年発行の『秋田県遺跡地図』に掲載されている周知の遺跡である五百刈田遺跡等の埋蔵文化財包蔵地が含まれることが判明した。このため秋田県教育委員会では昭和63年4月、6月に路線内における遺跡分布調査を行い、周知の遺跡3カ所、新発見の遺跡2カ所が計画路線上に存在することを確認した。

この結果に基づいて秋田県教育委員会と仙北土木事務所は遺跡保存についての協議を行い、 遺跡範囲確認調査を行って、その結果記録保存の必要なものについては発掘調査を実施するこ ととした。このため秋田県教育委員会では昭和63年8月に路線内における五百刈田遺跡の遺跡 範囲確認調査を行って発掘調査が必要な面積を確定し、平成元年6月12日から発掘調査を実施 したものである。

## 第2節 調査の組織と構成

所在地

秋田県仙北郡協和町上淀川字五百刈田31-6

調查期間

平成元年6月12日~6月30日

調查面積

320m²

調査主体者

秋田県教育委員会

調查担当者

谷地 薫 (秋田県埋蔵文化財センター学芸主事)

三浦 光男 (秋田県埋蔵文化財センター非常勤職員)

総務担当

佐田 茂 (秋田県埋蔵文化財センター主査)

高橋忠太郎 (秋田県埋蔵文化財センター主事)

調查協力機関

秋田県土木部仙北土木事務所

協和町教育委員会

## 第2章 遺跡の立地と環境

## 第1節 遺跡の位置と立地

五百刈田遺跡は、奥羽本線羽後境駅の南西約3kmにある。東経140度18分、北緯39度34分である。本遺跡の南側を雄物川の支流淀川が大きく蛇行して西流している。淀川流域には8段の河岸段丘が分布しているが、本遺跡はそのうちの低位から3段目の低位I段丘面上に立地し、層厚2~3mの中礫を主とする薄い段丘堆積物を伴っている(第1図、第2図)。

剝片石器の原石となる頁岩は含油第3系の女川層に含まれるが、本遺跡周辺では表層に女川層が現れておらず、本遺跡の北東約9kmの協和町大牧森周辺から宮田又沢川中流及び荒川中流を経て本遺跡から約8.5km東方の諏訪山川付近に至り、西仙北町床畑~生内~小杉山を経て本遺跡の南東約17kmの布晒まで北西-南東方向に帯状に分布している。

#### 引用参考文献

秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II ー上ノ山 I 遺跡・館野遺跡・上ノ山 II遺跡ー』 秋田県文化財調査報告書第166集 1988 (昭和63年)

秋田県 『秋田県総合地質図幅 刈和野』 1979 (昭和54年)

## 第2節 歷史的環境

協和町は旧石器時代の遺跡として有名な米ケ森遺跡をはじめ県内でも有数の遺跡の多い町である。本遺跡の周辺にも旧石器時代、縄文時代の遺物が採集された坊台遺跡等多くの遺跡がある(第3図)。縄文時代の遺跡は前期から晩期まで各時期の遺跡が淀川の河岸段丘を中心に存在し、淀川流域が縄文時代を通じて比較的良好な生活環境であったことを物語っている。特に本遺跡の西約1.5kmにある上ノ山II遺跡は、放射状に配列された縄文時代前期の大型住居跡が検出され、多種類の遺物がきわめて多量に出土した特異な集落跡である。また淀川流域にはいわゆる館跡も9カ所あり、岸館では鎌倉時代頃の土豪の墳墓から人骨が出土している。

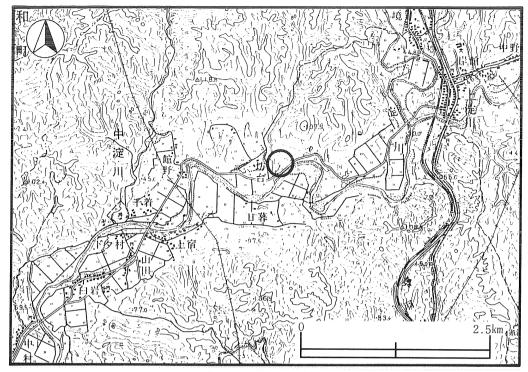
#### 引用参考文献

秋田県教育委員会 『秋田県遺跡地図(県南版)』 1987(昭和62年)

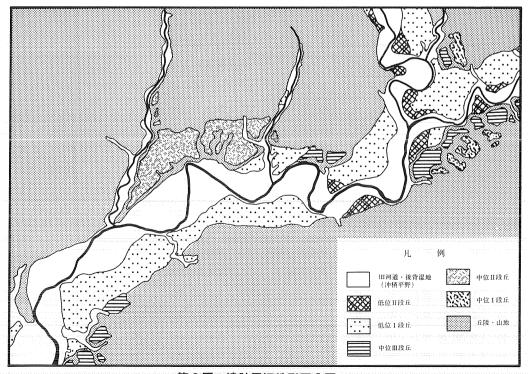
秋田県教育委員会 『秋田県の中世城館』 秋田県文化財調査報告書第86集 1981(昭和56年)

秋田県教育委員会 『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書Ⅱ 一上ノ山Ⅰ遺跡・館野遺跡・上ノ

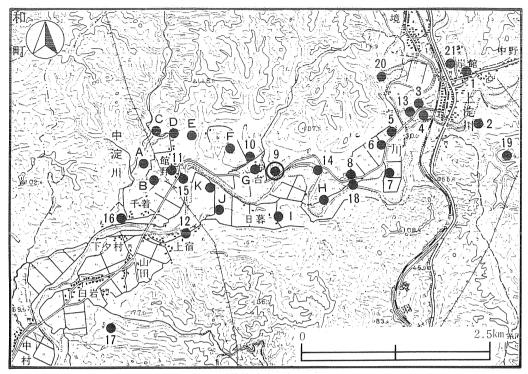
山II遺跡-』 秋田県文化財調査報告書第166集 1988 (昭和63年)



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡周辺地形区分図



第3図 周辺遺跡分布図

図中の番号 ・記号	遺跡名	時 代	時 期	図中の番号 ・記号		時	代	時 期
1	岸 館	旧石器・縄文・中世	縄文中期	17	石 神館	中	世	
2	鷺の巣	縄 文		- 18	和田の台Ⅲ	中	世	
3	中 島	縄 文	縄文後期	19	大 館 城	中	世	
4	西 町 後	縄 文	縄文中~晩期	20	唐 松 城	中	世	
5	和田の台Ⅰ	縄 文	縄文中期	21	岸館城	ф	世	
6	和田の台B	縄文・平安	縄文前~中期	A	上ノ山Ⅱ	縄	文	縄文前期
7	川 又	縄文	縄文前〜後期	В	上ノ山I	縄	文	縄文前〜晩期
8	和田の台II	縄 文	縄文後期	C .	未命名の遺跡	縄	文	
9	五百刈田	縄 文	縄文前~中期	D	未命名の遺跡	縄	文	
10	坊 台	旧石器・縄文	縄文晩期	E	未命名の遺跡	縄	文	
11	館 野	縄 文	縄文前~中期	F	未命名の遺跡	縄	文	
12	日 暮	縄 文	縄文晩期	G	未命名の遺跡	縄	文	****
13	唐 松 林 館	中世		Н	未命名の遺跡	縄	文	
14	館の沢城	中世	*	I	未命名の遺跡	縄	文	
15	長者森館	中世		J	未命名の遺跡	縄	文	
16	上総介館	中世		K	未命名の遺跡	縄	文	

第1表 周辺遺跡一覧表

## 第3章 発掘調査の概要

## 第1節 遺跡の概観

五百刈田遺跡は雄物川の支流淀川の右岸低位段丘上に立地する。長さ約50 m、幅約30 m の北東から南西に張り出すほぼ平坦な舌状台地で、標高は約33 m である(第4図)。遺跡の範囲はこの舌状台地全体に及ぶと思われる。調査対象地は遺跡(台地)南東側の縁辺部である。台地縁辺部の一部を掘削して現在の県道が東西に走っており、本来の地形は調査対象地よりも少し南東側に台地が広がっていたと考えられる。調査対象地から淀川までは直線距離で約40 m、淀川から遺跡までの比高は約13 m である。

遺跡付近の表層地質は礫、砂および粘土からなる段丘堆積物である(第6図)。その最上部のにぶい黄橙色〜明黄褐色の粘土層(地山)を掘り込んで遺構が構築されている。この粘土層は層厚約50cm〜1 m と薄く、その下部は粘土からシルトに漸移的に変化し、その下の砂礫層を覆っている。表土は3層に大別される。最上層の1層は黒褐色の腐植土で植物根が多く入り孔隙が多い。礫石器等の遺物が若干含まれる。2層は黒褐色土で遺物包含層である。層厚は5〜25cmと薄く部分的に欠落する。縄文時代前期と中期の遺物は2層中で混在しており層位的に分離できる状態ではなかった。3層は褐色土の漸移層で、遺物は含まれない。

調査区内にコンクリート電柱が4本残っており一部発掘できなかったが、この部分は電柱設置時に深く掘削されており、その際に出土したと思われる礫石器類が表面採集できた。

調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑2基、弥生時代の土坑1基、時期不明の焼土 遺構1基を検出した(第5図)。竪穴住居跡は縄文時代前期のもので、県道によってその大半 が失われており、北西壁と床面の一部のみが残存していた。土坑は2基が調査区外にまたがり、 1基は電柱埋設時に削られており完全な形状で検出したものはない。

遺物は縄文時代前期と中期の土器が主体を占め、後期、晩期及び弥生土器の土器片が若干含まれている。石器類は、剝片(フレーク)を除くと剝片石器は少なく、石皿、擦石、凹石、石錘等の礫石器が多い。遺物の総量はコンテナで60箱である。

## 第2節 調査の方法

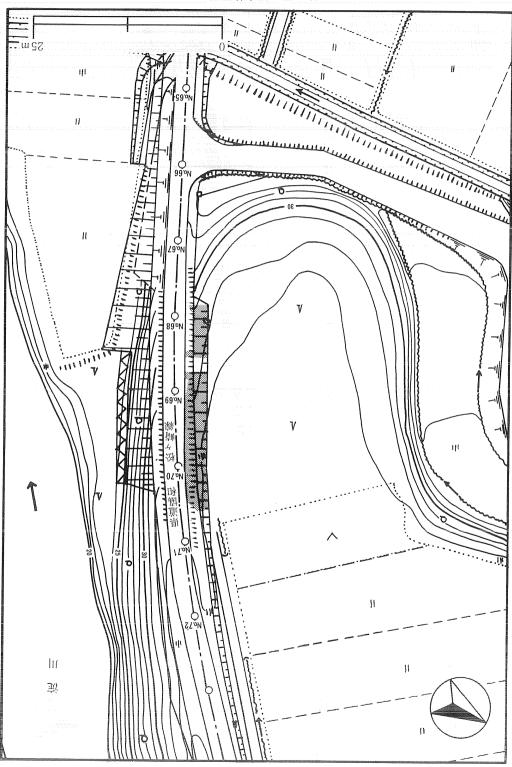
五百刈田遺跡の調査範囲は幅約6m、長さ約55mと狭長である。調査区の設定にあたっては、 仙北土木事務所が工事計画路線内に打設した路線中心杭のうちNo.70とNo.68を結んだ線を基 軸線とし、この基軸線上のNo.70中心杭から北東2m30cmの位置に基軸線に直行する線を設定して1区と2区の境界とした。この線より南東に4mごとに基軸線に直行する線を設定して、南西に向かって順に2~14区とした。基軸線と磁北のなす角度はN-53°-Eである。

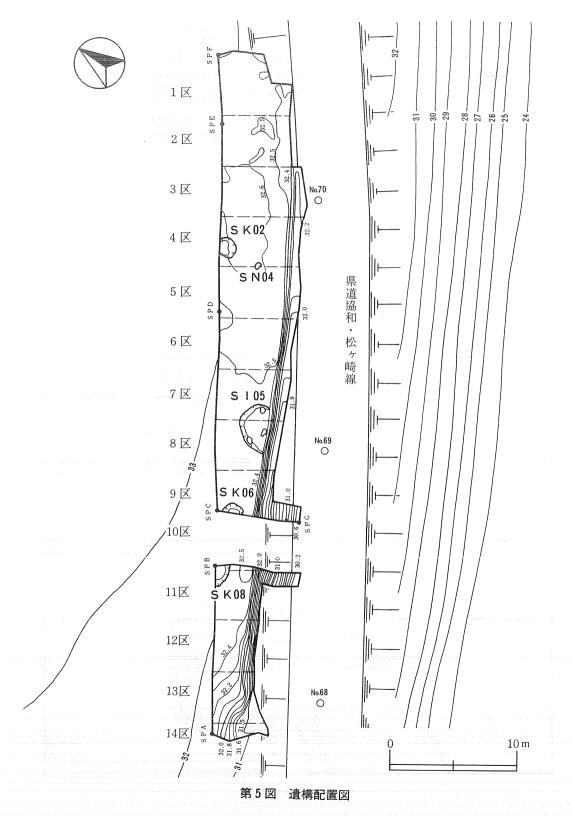
遺構実測図は縮尺10分の1で作成した。遺構にはその種別によりアルファベット略記号と、発見順を示す番号を付した。写真撮影は、35mmのモノクロとリバーサルフィルムを使用した。 室内における整理は、遺構については現場で取った平・断面図より第2原図を作成し、これをトレースした。遺物については洗浄・注記の後に実測図・拓影図の作成、写真撮影を行った。

### 第3節 調査経過

- 6月12日 現場において作業員説明会を行った後、機材を搬入する。調査区内の草刈り作業、ベルトコンベアー設置を行う。排土置場が狭いので、県道及び農道に排土が流出しないように土留棚を設置する。
- 6月13日 調査区北東側から表土除去作業に入る。縄文土器、箆状石器が出土した。表土の厚さは40~50cmで、一部は農業用水パイプ埋設によって攪乱されている。
- 6月16日 4区北西壁際で土坑(SK02)を検出した。さらにその南側で焼土遺構(SN04)と倒木痕を検出した。7区、8区にまたがって竪穴住居跡(SI05)らしいプランを検出したが大半は県道によって削られている。1区~5区の遺物は多くないが、擦痕のある扁平礫が多く出土している。石皿として使用されたものと考えられる。6区~7区は土器片が多く出土し、中には復元可能なものもある。縄文時代中期中葉の土器が主体である。
- 6月20日 SI05竪穴住居跡内から縄文時代前期、中期の土器片、石錐、磨製石斧が出土した。 床面近くの土器は前期のようである。
- 6月23日 11区で復元可能な縄文時代前期の土器がまとまって出土した。また10区、11区にまたがって土坑(SK08)を検出したが、調査区外にかかり約4分の1しか精査できない。
- 6月27日 SK08土坑内から弥生時代後期の土器片が出土した。土坑の土層断面を観察した結果、掘り込み面はSI05竪穴住居跡や他の土坑と異なり2層上面であった。
- 6月29日 SK08土坑の精査を終え、現場作業は終了した。
- 6月30日 プレハブ小屋撤去。機材搬出。発掘調査をすべて終了した。 この後、埋蔵文化財センターで遺物、図面類の整理作業を行い、報告書の作成を行った。

図囲靖査鵬 図 4 第





第6図 基本土層

## 第4章 調査の記録

発掘調査の結果、縄文時代の竪穴住居跡1軒、土坑2基、弥生時代の土坑1基、時期不明の 焼土遺構1基を検出した(第5図)。以下に竪穴住居跡、土坑、焼土遺構の順に説明する。

## 第1節 検出遺構と遺物

#### 1 竪穴住居跡

S I 05竪穴住居跡(第7図~第9図、図版4・9)

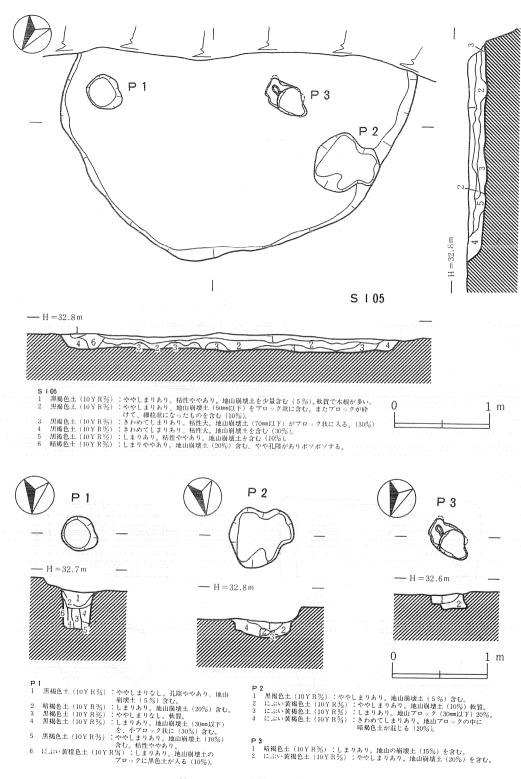
7区、8区にまたがって検出した。南側は県道によって切られて既に失われている。残存するのは北側の一部のみで全体の形状は明らかではないが、南北に長軸方向をもつ楕円形の竪穴住居跡と推定される。長軸方向の長さによっては大型住居跡の可能性もある。現存部分は幅(東西)約3 m 40cm、長さ(南北)は中心部で約2 m 30cm、東壁で約80cm、西壁で約1 m 60cmである。現存部分の床面積は5.8㎡である。壁高は約15cmで、床面から緩やかに立ち上がる。床面は平坦でよくしまっているが、木根による攪乱が著しい。埋土は自然堆積である。

床面では柱穴と考えられる深いピットを1基、浅いピットを2基検出した。P1は直径約36 cm、深さ約60cmの円筒形で埋土の土層断面には柱痕跡が観察された。P2はP1と長軸線に対称の位置にあるが、約16cmと浅く柱痕跡も認められない。P3も約14cmと浅いピットである。炉は検出されなかった。おそらくは南側の既に失われた部分にあったと考えられる。

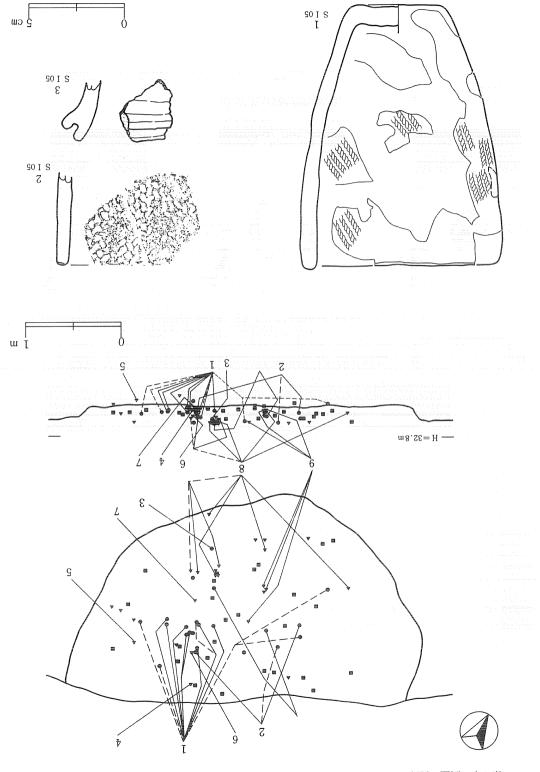
出土遺物は土器片21点、石器類27点である。それらのうち接合したものがあり個体数は土器 6、石錐1、不定形石器2、磨製石斧1、石皿2、剝片11である。土器は6個体分のうち1個体(1片)のみが縄文時代中期中葉のもので、他は前期のものである。

遺物は遺構確認面上から床面にかけて分布している。復元できた1の小型深鉢形土器は床面から埋土中にかけて出土した破片が接合した。推定口径10.4cm、底径4.8cm、器高14cmである。口縁部から胴部にかけて同一の原体によるRL単節斜縄文が施文されている。胎土には繊維を含む。内面の口縁端から約5cmまではスス状炭化物が厚く付着している。2は床面から出土した。口縁部から胴部にかけて組紐回転文が施文されている。口唇部には細いヘラ状工具による斜位のキザミ目が施されている。表裏両面とも全体にスス状炭化物が厚く付着している。胎土には繊維を含む。3は確認面上から出土した中期中葉の土器である。表面は無文で肥厚した口唇に横位に深い沈線をめぐらす。表面には厚くスス状炭化物が付着している。

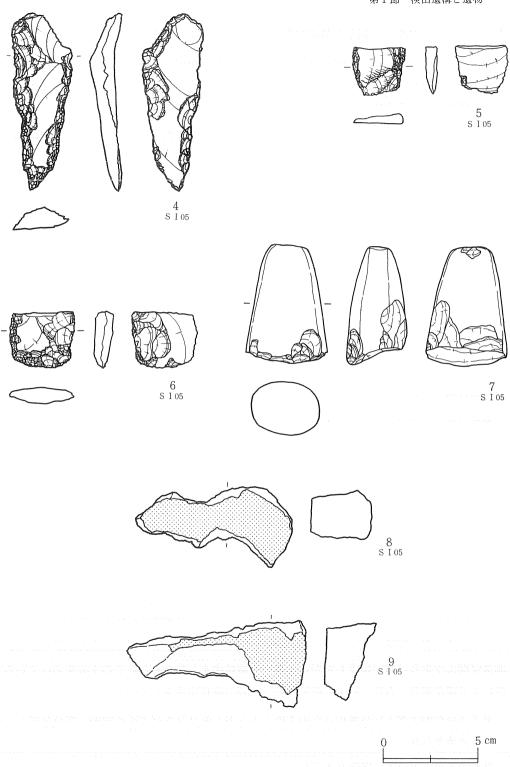
4は石錐である。表裏両面に素材剝片の剝離面を残し、両側縁に細かい2次加工を施して整



第7図 SI05堅穴住居跡



器土土出, 灰状土出於彭臧ヨ卦穴翌d0 I 2 図 8 策



第9図 SI05竪穴住居跡出土石器

形している。やや細く作出した錐部は長さ1.1cmと全体の長さに対してやや短めである。5、6は不定形石器である。5は素材剝片の表面の両側縁に細かい2次加工を施す。表面右側縁が刃部と考えられる。6は表面左側縁が刃部である。表面に2次加工を施して刃部を作出している。右側縁には表裏両面から2次加工を施して剝片の鋭い縁辺をつぶしている。5、6とも側縁の一端は2次加工を切る折れ面であるが、使用によって折損したものか、整形の最終段階で折り取ったのかは明らかではない。折れはいずれも表面側から力が加わった折れ方である。7は磨製石斧の基部である。本来の刃部が折損した後、表裏両面とも折れ面を打面として加撃した剝離痕がある。刃部再生を試みたものか、折れ面が斜めであることを利用して、折損後も使用したものであろう。8、9は石皿の破片である。8は厚さ3~4cmの扁平礫の片面が平坦に磨滅している。9も表面が平坦に磨滅した扁平礫である。8、9とも火熱によって赤変している。

#### 2 十坑

#### SK02土坑 (第10図、図版5・9)

4 区で検出した。北西側約2分の1は調査区外にかかり精査できなかった。平面形は推定径約1 m 20cmの不整円形で深さは約28cmである。基本層位3層上面から掘り込まれている。埋土は自然堆積である。

遺物は縄文土器破片が6点、礫器1点、剝片1点が出土した。底面から埋土中にかけて礫が含まれており、径約18cmの大円礫が1個出土した。10は胎土に繊維を含む土器の口縁部破片である。口唇部直下からLR単節斜縄文が施文されている。口唇部にも同一原体を回転押圧している。11は床面から出土した礫器である。軟質の凝灰岩製で、やや厚みのある原石の層状節理面を利用して薄く割って素材としている。縁辺に段階状の剝離痕がある。裏面には礫皮面が残る。

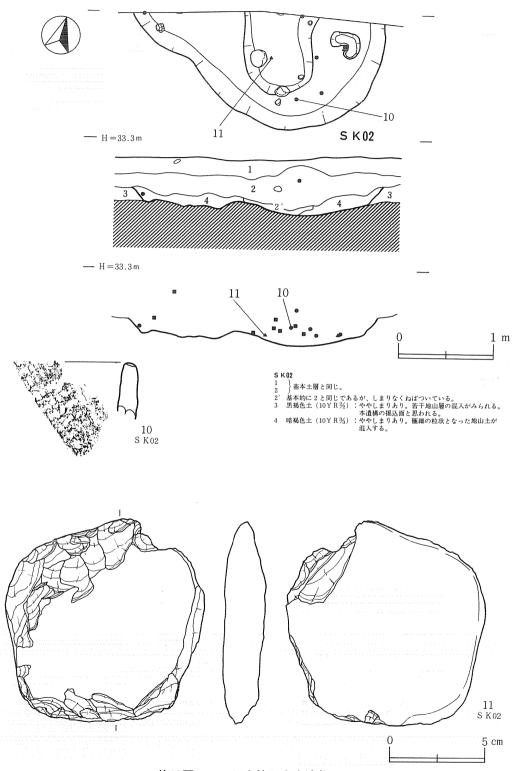
#### SK06土坑 (第11図、図版7・9)

9区で検出した。電柱埋設によって南西側は掘削されており約3分の1しか精査できなかった。一部に木根による攪乱が入るが、平面形は推定径約1 m80cmの円形で、深さは約20cmである。SK02土坑と同様に基本層位3層上面から掘り込まれている。埋土は自然堆積である。床面及び埋土中からは礫が出土したが、土器、石器は出土しなかった。この土坑を切っている木根による攪乱部分からは、胎土に繊維を含む土器の破片が出土している。

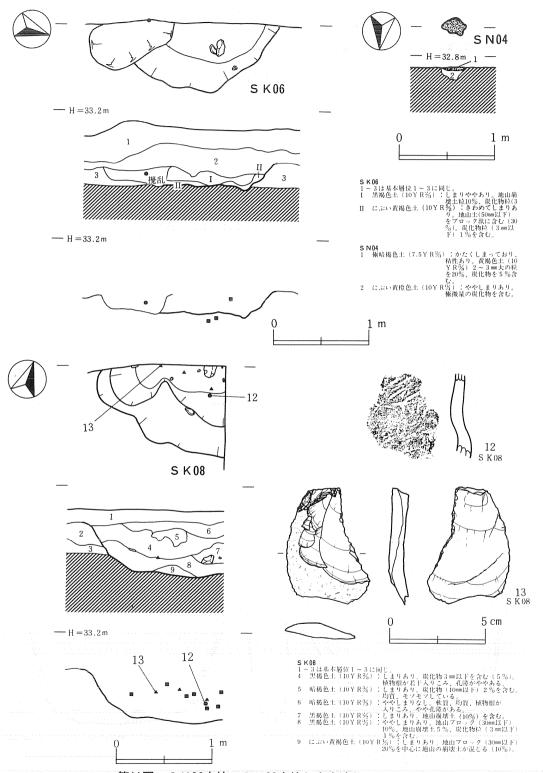
本土坑は形態や埋土の状態がSK02土坑とよく似ておりSK02土坑と時期、性格が同じ土坑であると考えられる。

#### SK08土坑(第11図、図版6・9)

10区、11区にまたがって検出した。北側は調査区外、東側は電柱埋設に伴う掘削で精査でき



第10図 SK02土坑と出土遺物



第11図 SK06土坑、SK08土坑と出土遺物、SN04焼土遺構

ず約4分の1を精査したにとどまった。平面形は推定径約1 m 50cmの円形または円形に近い楕円形になるものと考えられる。基本層位2層上面から掘り込まれており、深さは約60cmである。埋土は自然堆積である。埋土中には礫が含まれており長さが15cm以上ある大きな礫もある。遺物は土器片が1点、剝片が3点出土した。12は壺形土器の頚部で節の細かいLR縄文が施文されている。胴部から頚部にかけての屈曲部分には縄文が施文されず無文帯となっている。13は微小剝離痕のある剝片である。表面に礫皮面のある縦長剝片の内湾する1側縁に使用痕と考えられる微小剝離痕がある。

#### 3 焼十潰構

#### S N 04 焼土遺構 (第11 図)

4区、5区にまたがって地山面に長軸約24cm、短軸約16cmの不整楕円形の焼土を検出した。 焼土の厚さは約5cmである。焼土中には炭化物が含まれている。焼土下の地山土が火熱で漸移 的に赤変しており、この場所で火が焚かれたことがわかる。この焼土遺構の周辺からは遺物は 出土しなかった。

### 第2節 遺構外の出土遺物

1 土器 (第12図~第17図、図版 9~11)

遺構外出土土器は時期毎に群別し、出土量の多かった第 I 群土器は文様によってさらに類別した。

- 第1群土器 縄文時代前期の土器(第12図・第13図、図版 9・10)
  - 第1類 不整撚糸文が施文されるもの(第12図14・17・19~21)
  - 第1類の口縁部破片は、さらに次のa、bに分けられる。
  - a. 口縁部に刺突や指頭押圧痕のあるもの(第12図14・17)
  - b. 口縁部に刺突や指頭押圧痕のないもの(第12図19)

14は胴部にRL単節斜縄文を施し、その後口縁部に幅約5cmの不整撚糸文帯をもつ。さらに口唇部外面には大きな指頭押圧列が横位にめぐる。胎土には多量の繊維を含む。17は口縁部に横位に不整撚糸文を施し、口唇部には浅い指頭押圧によるキザミを加えている。胎土には少量の繊維と中粒砂を含む。19は14、17と同様に口縁部に不整撚糸文帯をもつ土器であるが、口唇部に指頭押圧によるキザミ目が施されていないものである。20、21は同一個体である。胴部には0段多条のRL単節斜縄文が施され、胴部の上部から口縁部にかけては幅10cm以上の不整撚糸文帯になると思われる。20の不整撚糸文は5段が1単位となっており、3単位以上施文されていることが観察される。胎土には多量の繊維を含み焼成は良好である。

第2類 斜縄文が施文されるもの (第12図18・22・23)

18はLR単節斜縄文が施される口縁部破片で、口唇部には浅い指頭押圧によるキザミが施されている。胎土には多量の繊維を含む。22は0段多条のRL単節斜縄文、23は0段多条のLR単節斜縄文が施されている。ともに胎土には繊維と中粒砂を含み表面にはスス状炭化物が付着している。

第3類 非結束羽状縄文が施文されるもの (第12図15・16・24・25)

24、25は異種原体を用いた非結束羽状縄文が施文されている土器である。0段多条のRLとLRの単節斜縄文原体を用い、交互に帯状に横方向に回転施文して羽状縄文としている。いずれも胎土には繊維を含む。25は表面にスス状炭化物が付着している。15、16は同一個体である。胴部にはRL単節とLR単節の斜縄文が交互に縦方向に回転施文され、縦の羽状縄文としている。口縁部には指頭押圧による刺突列が2段横位にめぐる。口唇部には突起があり突起の中心部には細い竹管様の棒の先端による刺突が施されている。胎土には少量の繊維と石英の多く混じる中粒砂が含まれザラザラしている。

第4類 異方向縄文が施文されるもの (第12図26)

26は 0 段多条のR L 単節斜縄文原体を横位と斜位に回転押圧し、施文単位ごとに施文された 条が斜位と縦位になるものである。この破片の上部は粘土帯の接合部分が剝離した割口である が、その剝離面にも同様の縄文が施文されており、この部分の粘土帯の接合は縄文を施文した 後にそれを覆うように接合されたものであることがわかる。胎土には多量の繊維を含み表面に はスス状炭化物が付着している。

第5類 組紐回転文が施文されるもの (第13図27・28)

27、28は組紐原体を回転押圧したものである。いずれも胎土には繊維と石英が多く混じる中粒砂を含む。27は内面にスス状炭化物が付着している。

第6類 撚糸文が施文されるもの (第13図29)

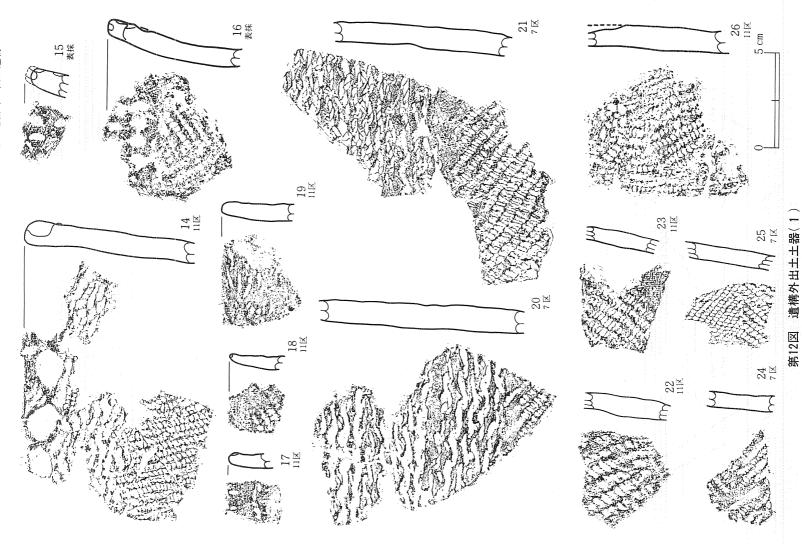
29は細かいLの撚糸文が縦位に施文されるものである。胎土には繊維を含む。

第7類 S字状連鎖撚糸文が施文されるもの(第13図30~33)

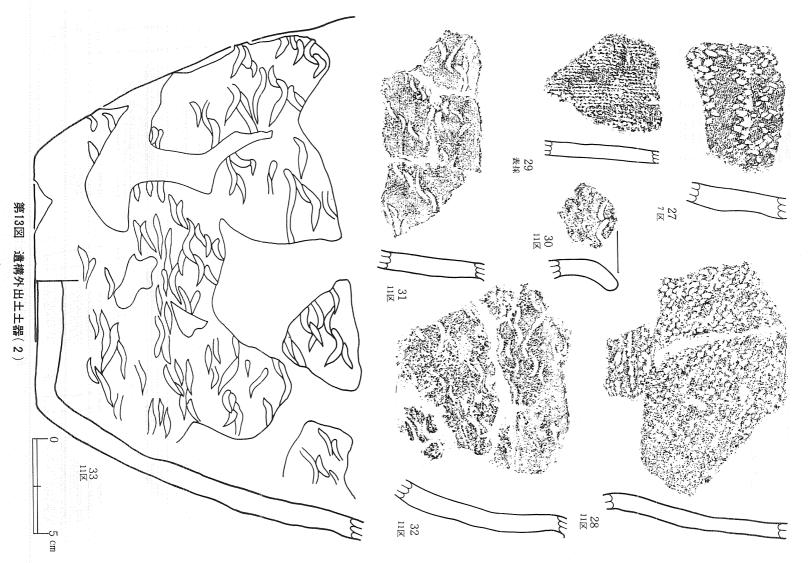
30~33は同一個体である。11区からまとまって出土したもので、第7類はこの1個体のみである。器形は胴部が底部からやや開き気味に立ち上がりバケツ形をしている。短い口縁部が屈曲して外反する。底径約13.0cmである。口縁部から底部まで同一原体によるS字状連鎖撚糸文が施文されている。胎土には多量の繊維と細粒砂を含む。

第11群土器 縄文時代中期の土器(第14図~第16図、図版10・11)

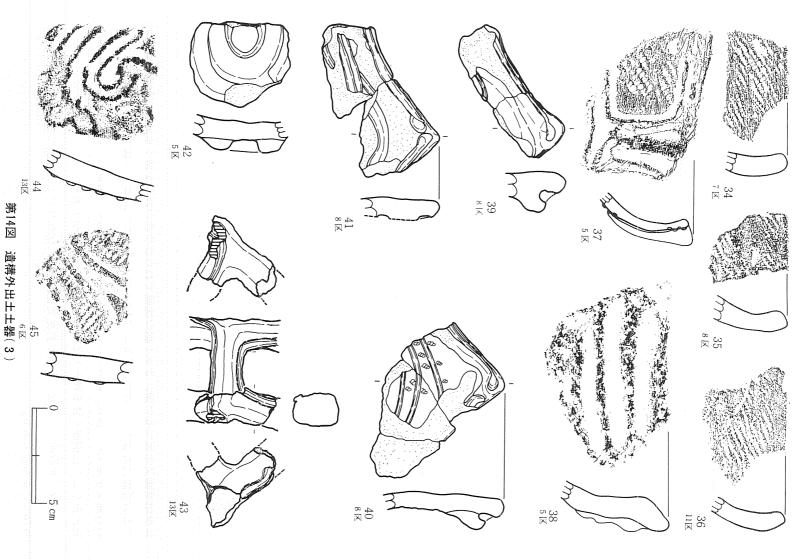
34~36はキャリパー形に内湾する口縁部破片である。いずれもLR単節斜縄文が施文されている。34、35は口唇部直下まで縄文が施文されるが36は口唇部直下は幅約1cmが無文帯となっ



.



第4章 調査の記録



第2節 遺構外の出土遺物

ている。

37はキャリパー形に内湾する波状口縁である。縦に1本垂下する隆線を貼付け、それを境として細い隆線とその内側に沿った一条の沈線によって口縁部に方形の区画文が描かれ、その内部にLR縄文が施文されている。この縄文は隆線と沈線によって文様を描く前に施文されたものである。口唇部には横位に1条の細い隆線とそれを縁取りする沈線がめぐり縦に垂下する隆線の上面に渦巻が描かれている。

38は波状口縁で太い隆線が2条めぐり口縁部が肥厚する。隆線は断面が3角形につくられ口唇部に平行に横位にめぐっている。

39~41は同一個体と考えられる。波状口縁の頂部が肥厚し、口唇部に太い沈線を横位にめぐらせている。この沈線の端部は波状口縁の頂部では同一の工具の端部による刺突によって途切れ、さらにその右側から次の波頂部に向かって沈線が描かれている。41は肥厚部分の貼付けが剝落している。全面にLR単節斜縄文を施した後、太い沈線による文様が描かれている。器表面の剝落が著しく口縁部から胴部にかけての文様のモチーフは明らかではない。いずれも表面にスス状炭化物が付着している。

42は円形または楕円形モチーフの太い隆線が貼付けられている。

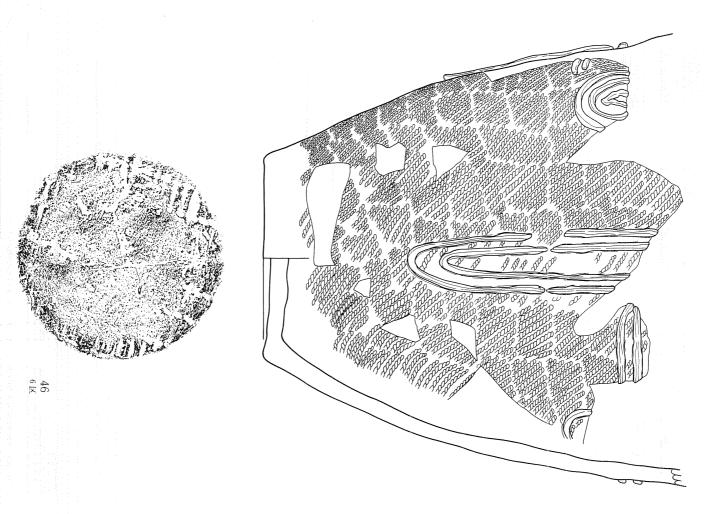
43はH字形の橋状把手の一部である。この橋状把手は、胴部中央~下半に最大径をもち胴部 上半から口縁部にかけては内傾しながら直線的に立ち上がる樽形の器形の土器に付くものと考 えられる。中心部でくの字形に屈曲しその上下は透かし穴になると思われる。上面の内側に沿っ てU字形に細い隆線が貼付けられ、下部の外側から下面には1条の沈線が引かれている。

44~47は胴部に斜縄文を施文した後、細い粘土紐を貼付けた隆線で渦巻や曲線的な区画を描くものである。46は上半を欠失するが底径10.6cmの深鉢形土器である。全面にRL単節斜縄文を施した後、細い粘土紐を貼付けた隆線で文様を描いている。文様は4ヶ所に2本1組の隆線をU字形に垂下させ、そのうちの右側の2本は胴部中央付近で直角に横位に伸び、先端がわらび手状に渦巻を描いている。隆線の器面への貼付けが弱く、貼付けた部分が剝落しておりやや粗雑なつくりである。底面の周縁には網代痕が残る。

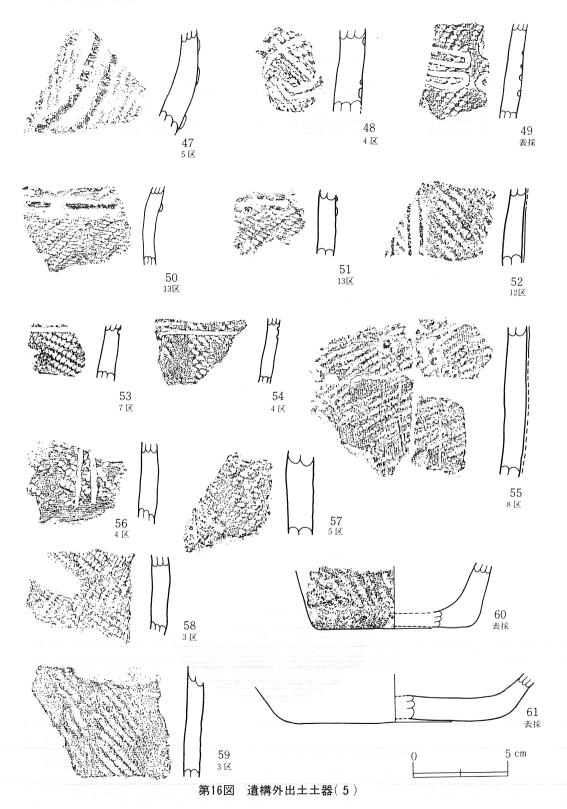
48、49は斜縄文を施文した器面に渦巻や曲線的なモチーフを沈線で描くものである。48はR L単節斜縄文を施文した後、2本1組の沈線でわらび手状の渦巻を描くもので、渦巻の端部で 2本の沈線が合流する。器壁は1.2cmと厚手で胎土には径約5mm程の小礫を含む。49はRLR複 節斜縄文を施文した後に、縦方向にU字形に連結する沈線を2組描いている。U字形の端部に 向き合うように曲線文様も描かれているがモチーフは不明である。

50はRLR複節、51はRL単節の斜縄文を縦方向に回転施文した器面に横位の隆線が貼付けられているものである。

第15図 遺構外出土土器(4)



第2節 遺構外の出土遺物



52、55はLR単節斜縄文を縦方向に回転施文した器面に2本1組の隆線が縦に貼付けられている。55は両側を沈線によって縁取りされた2本の隆線が垂下するものである。隆線はほとんど剝落しているが、貼付け前に施文されていた地文の斜縄文が明瞭に残っている。

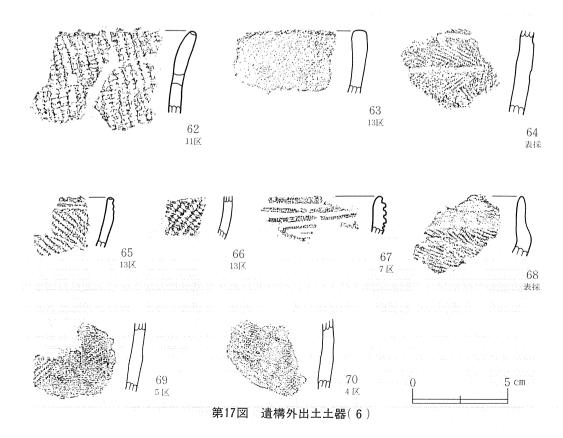
53、54はLR複節斜縄文を縦方向に回転施文した器表面に横位の沈線が描かれているもので、 53は1条、54は平行に2条が観察される。

56、57は縦方向の沈線が引かれている土器である。56は胴部下半で底部に近い部位の破片で、 RL単節斜縄文の施文された器面に縦方向に2本1組の沈線が引かれている。裏面全体に厚く スス状炭化物が付着している。57はRLR複節斜縄文を縦方向に回転施文した後、縦方向の沈 線が引かれている。器壁は1.3cmと厚手である。

58、59は斜縄文のみが施文された胴部破片である。58はRL単節斜縄文を横方向に59はLR 単節斜縄文を縦方向に回転施文している。

60、61は底部破片である。60は胴部にLRL複節斜縄文を縦方向に回転施文している。61は 底面から底部外面にかけて研磨され無文となっている。底面は平坦ではなくてやや凹凸がある。 第III群土器 縄文時代後期の土器(第17図、図版10)

62はやや外反する口縁部で口唇部に指頭押圧によるキザミを施し小波状となっている。口縁



部から胴部にかけてRL単節斜縄文が施文されている。63はやや内傾する口縁部破片で表面は 研磨され無文である。64は沈線区画文の中に細かい斜縄文を充塡している。縄文原体はRL単 節で回転方向は縦と横が混在している。

#### 第Ⅳ群土器 縄文時代晩期の土器 (第17図、図版11)

65は口唇部にキザミ目が施され口唇直下に2条の沈線がめぐる小型鉢形土器である。胴部は RL単節斜縄文である。66はLR単節斜縄文が施文された胴部破片である。いずれも薄手で焼成は良好である。

#### 第 V 群土器 弥生時代の土器 (第17図、図版11)

67は変形工字文が施文された鉢形土器の口縁部破片である。68は口縁部が内傾した後やや外反する鉢形土器である。器面全体に細かいRL単節斜縄文を施した後、内傾した口縁部はナデによって縄文を消して無文化している。69、70は0段多条の原体を原体の施文部位をずらしながら縦方向に回転施文している。縄文は約1cmの間隔を置いて1~1.2cmの幅で帯状に施文されている。

#### 2 石器 (第18図~第29図、図版12~14)

石器類は287点出土した。Toolには多様な器種があるが、石皿、擦石、石錘といった礫石器類が多い。以下に器種毎に説明する。

#### 石鏃(第18図71、図版12)

石鏃は1点出土した。71は凹基無茎鏃で先端が折損している。表裏両面とも素材剝片の剝離面を残し、左側縁と基部に2次加工を施して整形している。右側縁は先端に近い部分にのみ2次加工が施され側縁は折り取り面がそのまま残っている。裏面には焼けはじけた剝離痕がある。石錐(第18図72、図版12)

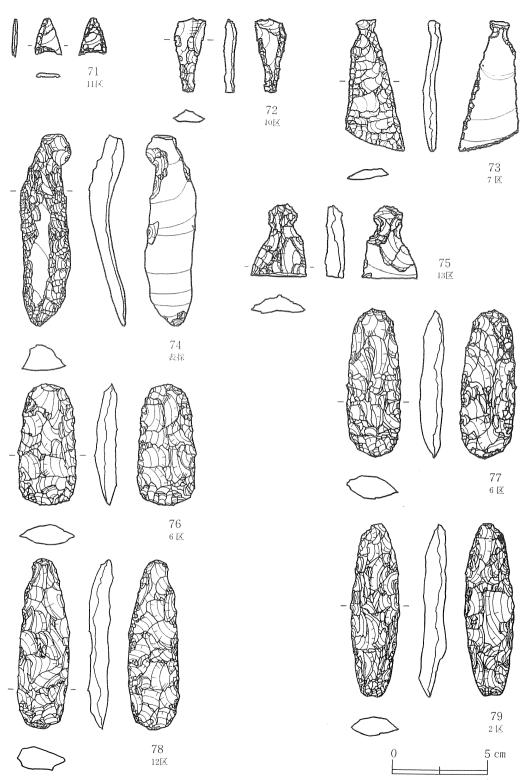
石錐は遺構外からは1点のみ出土した。72は先端が折損している。

#### 石匙 (第18図73~75、図版12)

石匙は3点出土した。いずれも縦型石匙である。73は縦長剝片の打面側にノッチを入れ、つまみを作出しつまみの上面に打面を残している。表面は丁寧な押圧剝離によって仕上げられている。刃部はつまみの対片で刃部の裏面には使用によると考えられる微小剝離痕がある。右側縁は表裏両面から刃つぶしが施されている。74も縦長剝片を素材としつまみの上面に打面を残している。表裏両面に素材剝片の剝離面を残し、2次加工は側縁とつまみ部分にのみ施されている。刃部は左側縁と考えられる。75は下半が折損している。左側縁が刃部である。表面は全面に2次加工が施されているが、裏面はつまみを作出するノッチのみである。

#### 篦状石器(第18図76~第19図85、図版12)

篦状石器は10点出土した。2次加工の仕方によって次の3類に分類する。



第18図 遺構外出土石器(1)

- a類 表裏両面とも全面に2次加工を施し、素材剝片の剝離面を残さないもの.
- b類 素材剝片の表面に全面に2次加工を施し主要剝離面側は基部の端部と両側縁 にのみ2次加工を施して、主要剝離面の一部をそのまま残すもの.
- c類 素材剝片の表面にのみ2次加工を施すもの.

#### a 類 (第18図76~第19図80、図版12)

a類は5点出土した。76、77は基部と刃部の幅にあまり差がないが、78は基部が細くなる形態である。79は中央部に最大幅をもち刃部と基部は細い。76~78は刃部が外湾するが79、80は直線的である。

#### b類 (第19図81~83、図版12)

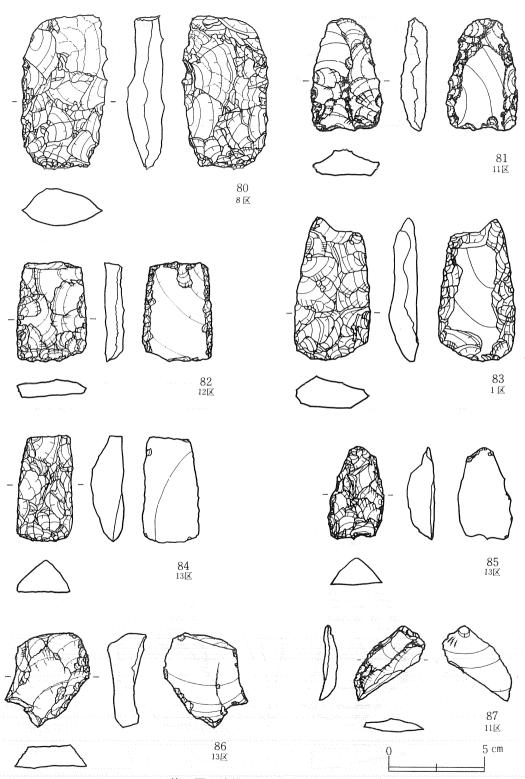
b類は3点出土した。いずれも横長剝片を素材としている。81は基部が細くなり3角形に近い形態である。直線的な刃部であるが使用による階段状の剝離痕が著しい。82は基部と刃部の幅の差が小さく長方形に近い形態である。83はやや大型で基部は折れ面をそのまま残して左側が突出している。刃部は外湾するが特に右側に使用による剝離痕が顕著にみられ左右非対称形である。

#### c 類 (第19図84・85、図版12)

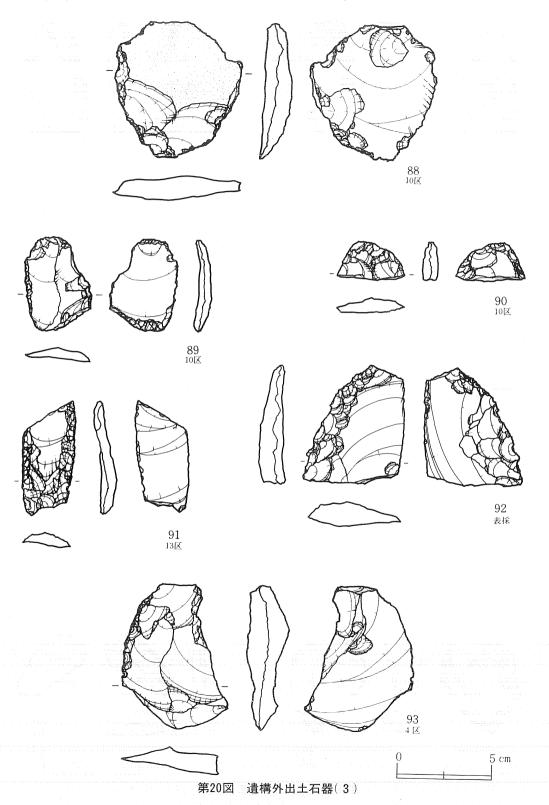
c類は13区から2点出土した。a類、b類に比べて表面中央が高く盛り上がるように2次加工を施しており、断面形は3角形を呈する。基部のつくりによって84は長方形、85は3角形と平面形は異なるが、刃部の形状は類似する。いずれも使用による刃こぼれと思われる階段状の微小剝離痕が顕著にみられる。

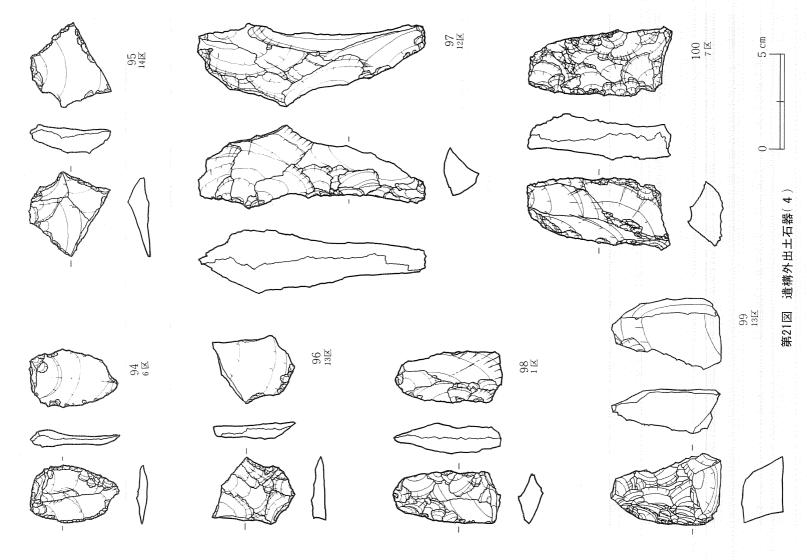
#### **不定形石器** (第18図86~第21図97、図版12·13)

不定形石器は剝片に2次加工を施して刃部を作出しているものを一括した。14点出土した。86はやや厚みのある剝片の打面側を折り取って除き、末端側の1側縁に刃部を作出したものである。87は縦長剝片の末端から1側縁にかけてを斜めに折り取り、他の側縁から折り取りによって生じた末端側の鋭い先端部までに細かい2次加工を施して刃部を作出している。86、87とも刃部は丸みを帯びて外側に湾曲している。88は幅広の縦長剝片の両側縁に2次加工を施して刃部としている。89は縦長剝片の左側縁に刃部を作出し末端側は表裏両面から、右側縁は表面のみに刃つぶし加工を施している。90は素材剝片を折り取りヒンジ気味の末端を利用して、表面は全面、裏面は周縁のみに2次加工を施したものである。刃部は右側縁で左側縁は表面側から裏面側に急角度な2次加工による刃つぶしがおこなわれている。91は上下が折れ面である。表面に2次加工を施し左側縁に刃部を作出している。右側縁は刃つぶしである。刃部には表面に2次加工を施し左側縁に刃部を作出している。右側縁は刃つぶしである。刃部には表面に刃こぼれが認められる。92は横長剝片を素材とし一端を折り取って成形した後、打面側の表裏両面に2次加工を施して刃つぶしを行い、その対辺の素材剝片末端をそのまま刃部として使



第19回 遺構外出土石器(2)





- 31 -

用している。刃部には刃こぼれが認められる。刃つぶしのために裏面に施された2次加工の剝離痕は磨滅して稜が丸くなりスベスベしている。93は縦長剝片の1側縁を折り取って除き、他の側縁に2次加工を施して刃部を作出したものである。94は縦長剝片の右側縁表面に刃部を作出しているが、左側縁も使用によると思われる微小剝離痕がある。95、96は素材剝片の一部を折り取り側縁に2次加工を施したものである。95は左側縁には刃つぶしが行われ、右側縁と折れ面を刃部としている。96は2側縁に折れ面をそのまま残し1側縁に刃部を作出している。97は厚みのある素材を用い両面の側縁に2次加工を施して整形し、先端を刃部としている。刃部には使用による階段状の微小剝離痕が顕著に認められる。

# 2次加工のある剝片 (第21図98~第22図105、第24図108、図版12)

98~100はやや厚みのある剝片の一面に両側縁から細かい 2 次加が施されたものである。一端は折れ面がそのまま残り他の一端は細く尖り気味である。断面形は 2 次加工を施した面を底辺とする 3 角形を呈する。98は両側縁の他に折れ面の残る一端とは反対の端部にも 2 次加工が施され箆状石器 a 類の端部と類似するが、刃部とはなっていない。これらは箆状石器 a 類の未製品と考えられる。

101は厚みのある素材の表裏両面の全面に2次加工が施されている。表面の一部に礫皮面がわずかに残る。102はやや厚みのある縦長剝片の表面全面と裏面の一部に2次加工を施している。裏面は打面側から末端にかけての側縁には2次加工が施されているが、右側縁と裏面の下部約2分の1は素材剝片の主要剝離面が残っている。側縁の2次加工は表裏両面から交互に施されており刃部は形成されてない。不定形石器または石槍の未製品と考えられる。103は厚みのある素材の側縁に2次加工を施しているが一端は折れ面が残っている。側縁の剝離痕は不規則で刃部も形成されておらず、石槍か箆状石器を製作する初期の段階で放棄された未製品と考えられる。104は縦長剝片の表裏両面の末端と一側縁に2次加工が施されたものであるが刃部は形成されていない。不定形石器の未製品と考えられる。105はやや大型の縦長剝片の両側縁に2次加工を施している。側縁のうち礫皮面の残る部分は裏面にのみ2次加工が施される。この部分を刃部とする不定形石器を製作する途中で放棄された未製品と考えられる。108は礫皮面を残す厚みのある素材を用い、礫皮面以外の側縁に不規則な剝離痕が認められる。

## 石核 (第23図106·107、図版12)

106は分割された石材のうち礫皮面の残る小型の石材の折れ面を打面として、分割の際の主要剝離面から3枚の剝片を剝ぎ取り、さらに打面を180度替えて礫皮面側を作業面として4回の加撃によって小剝片を剝ぎ取っている。

107は礫皮面を打面とし、打面は替えず作業面を90度転移して剝片剝離を行っている。剝ぎ取られた剝片は大小様々で大きさに規則性は認められない。同一作業面における最も新しい剝

第22図 遺構外出土石器(5)

離痕は末端がヒンジで終わっており、末端がフェザーの剝片を剝ぎ取ることができなくなった 時点で作業面を転移し、さらに放棄されるに至ったものと考えられる。

#### 微小剝離痕のある剝片 (第24図109~111、図版12)

109は1側縁、110は両側縁、111は両側縁と末端に使用痕と思われる微小剝片痕の認められるものである。

#### 礫器 (第24図112)

112は板状に分割された3角形の石材の1辺の表裏両面に剝離痕が認められるもので、両方の剝離痕が切り合う端部は細かい階段状につぶれている。表面は剝離面であるが1側面と裏面は礫皮面である。

## 半円状扁平打製石器 (第25図113~116・第26図117、図版13)

113は扁平な礫の底縁部を打ち欠き刃部を作出している。さらに連続する他の1側縁の半ばまで打ち欠きは続いている。打ち欠きによって形成された刃部の先端は一部に擦面がある。

114は扁平な礫の全側縁を打ち欠き刃部の作出と整形を行っている。115は素材の底縁部を打ち欠いて刃部を作出し、側辺の両端に抉りをもつものである。刃部は擦られて平坦面が形成されている。表面の一部にも擦痕が認められる。116も側縁の両端に抉りをもつものである。表裏全面及び刃部の対辺は擦られて平坦にされ、刃部と抉り部分には擦った痕跡が無い。表裏面の擦痕は打ち欠きによって形成された剝離面に一部にも及んでいる。117は1側縁を分割して取り除いた扁平な礫の底縁部を打ち欠き刃部を作出している。刃部は擦面となっており打ち欠きの痕跡はほとんど消滅している。

#### 擦石(第26図118・119. 第27図120・121、図版13)

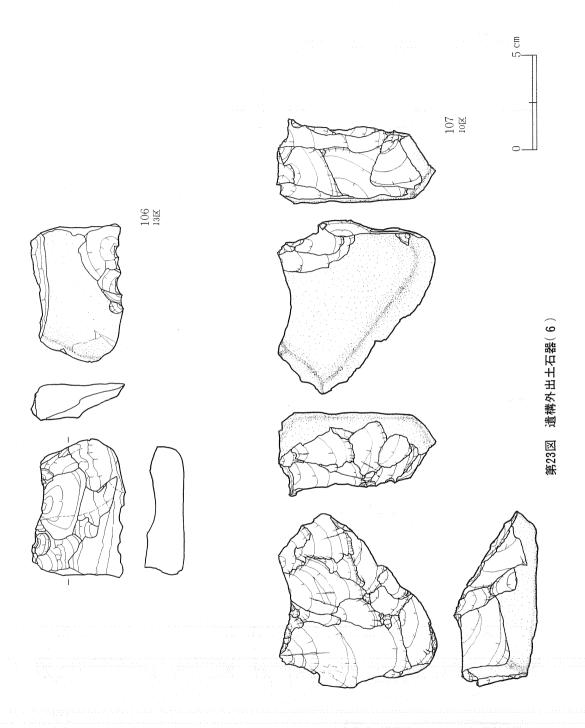
石材の辺・稜を擦っているものである。118は厚みのある長い礫の一辺の稜が主要な平坦な擦面となっているが、その擦面と隣接する両面及び擦面の対辺の面にも擦面が認められ、両端を除く素材全体が擦られている。119は棒状の石材の一辺に主要な擦面を有し稜が平坦になっている。120は断面形が3角形となる礫の角度の小さい2側縁に擦面が形成されている。121も断面形が3角形となる礫の最も角度の小さい1側縁に擦面が形成されている他、その対面も擦られた痕跡が認められる。折損しおよそ2分の1を欠失している。

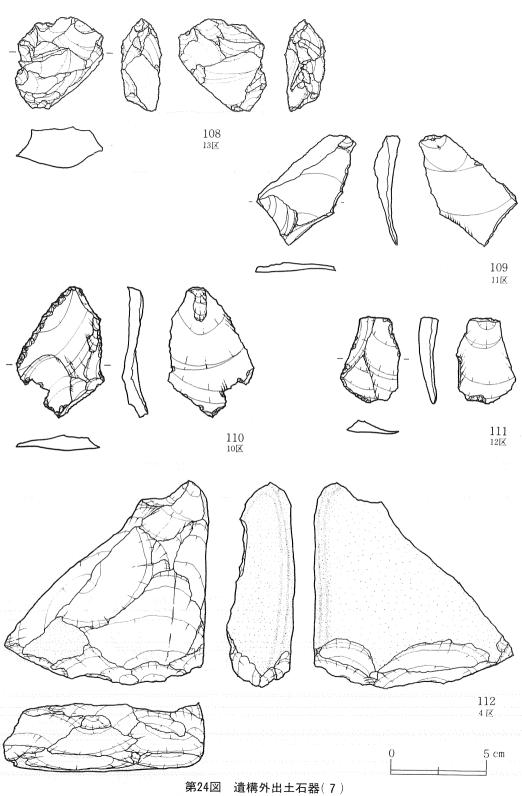
#### **凹石**(第26図122・123、図版13)

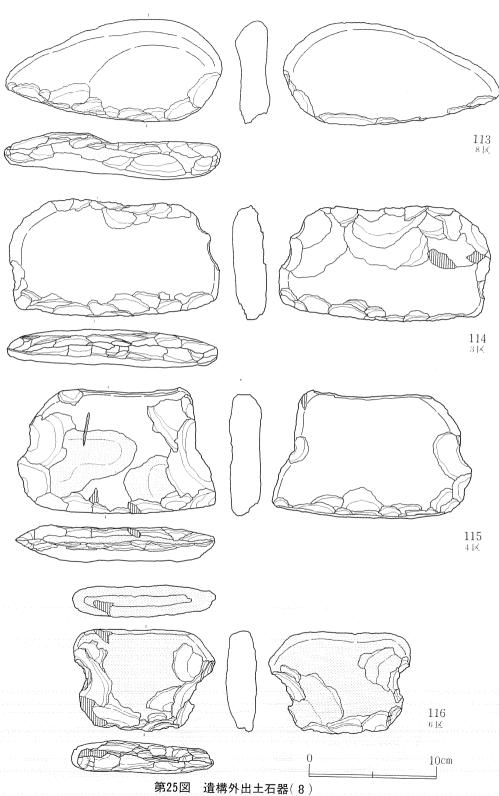
122は表裏両面とも磨面を有しさらに表面の中央に敲打による凹みがある。123は楕円形の礫を素材とし表面と1側面に磨面を有する。表裏両面に素材の中央部に側縁に平行に連続的に敲打による凹みが並んでいる。

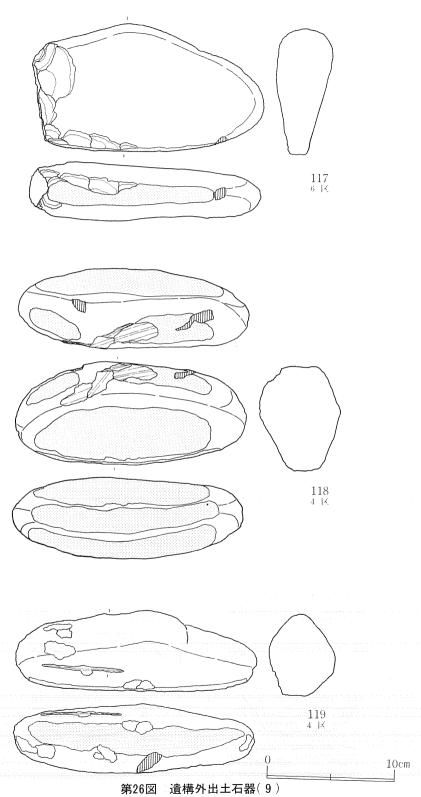
#### **石錘**(第28図124~128、図版13·14)

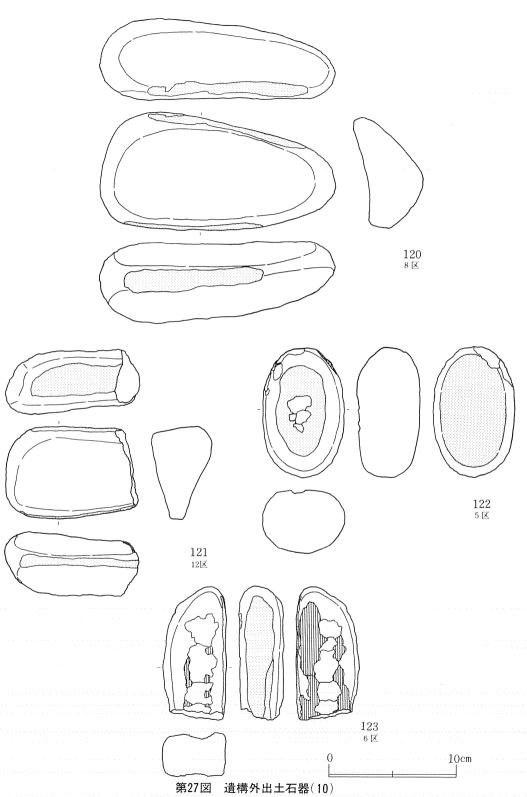
扁平な礫の両端を打ち欠いた礫石錘である。素材は楕円形のものや長方形に近いもの、卵形











のものなどがある。大きさと重量については第5章に後述する。全部で22点出土したが一部欠失しているものが3点、打ち欠きが1ケ所のみで対辺には素材の礫に初めからある凹みを利用しているものが2点ある。

## 磨製石斧 (第28図129、図版13)

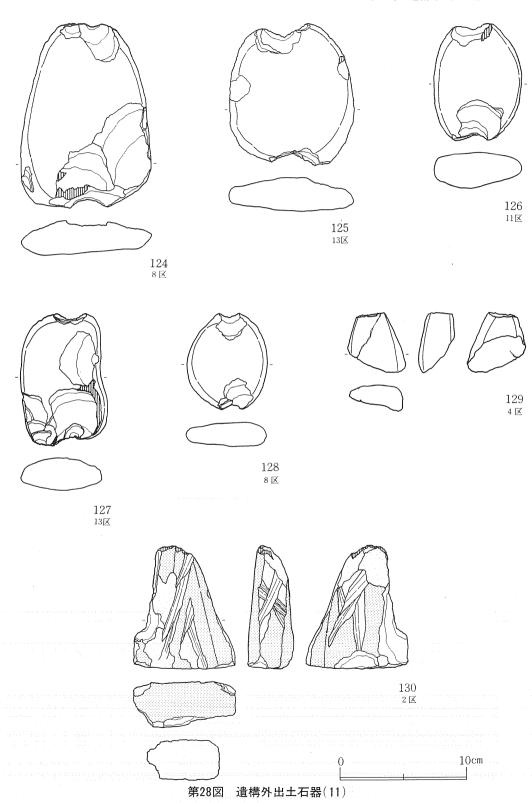
129は磨製石斧の基部である。先端も刃部も欠失している。稜は丸みを帯びている。

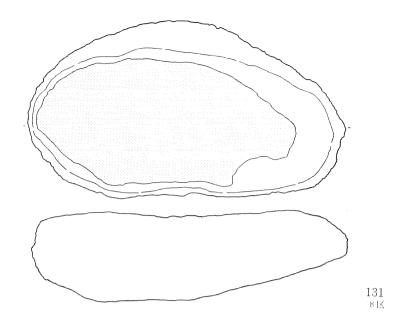
## 砥石 (第28図130、図版13)

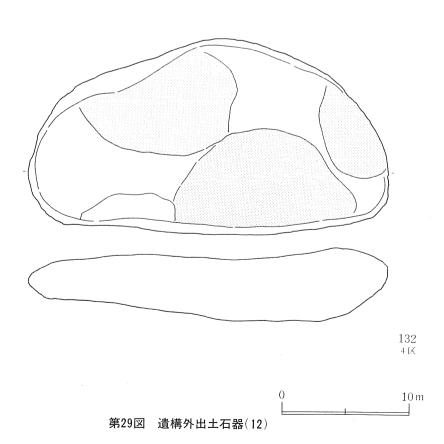
130は凝灰岩製の砥石である。表裏両面及び1側縁を使用している。表面には研磨によって生じた幅6~9mmの溝が2本平行に走り、それに交わる溝も1本認められる。いちばん長い溝ははじめから1本の溝ではなく長さ5~6cmの溝が同じ方向に重なっているものである。側面には幅が約4mmとせまく浅い溝が3本、それに交わる方向に幅約9mmの溝が1本認められる。裏面は表面と同じく交叉し重複しながら4本の溝が観察される。溝以外の部分はよく研磨され面取りされている。

#### 石皿 (第29図131·132、図版14)

131・132はいずれも楕円形の礫の一面に擦痕があるものである。131は擦られて表面の中央がやや凹んでいる。132は表面の3ケ所に擦面があり、その部分がやや凹む。このような擦痕のある自然礫は合計41個出土した。ほとんどが扁平な礫の片面に擦痕があるもので土手や脚のあるものはない。

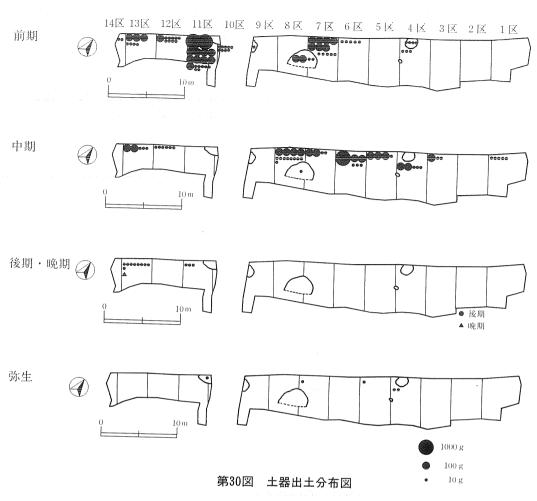


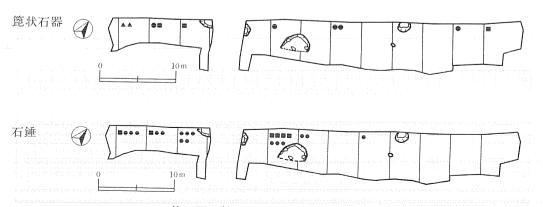




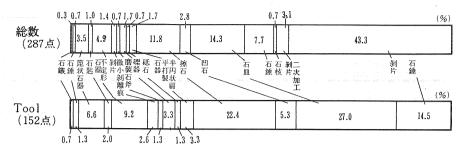
No.	T	器積	出土地点	最大長	最大旗	最大厚	重量	刃部長	備考		挿図	図部	No	_	器種	出土地点	最大長	最大幅	最大厚	重量	刃部長	備考	括网	図版
4	石		SI05	9.3	3.2	1.3	28.1	7710174	kin 42		9	9	10		- 138 石 核	10区	8.3	9.1	収入序	309.6	月	ун <i>1</i> 5	23	
5			S I 0 5	2.6	2.8	0.7	4.6	2.1			9	9	10	-	2 次加工のある剝片	13区	4.7	4.5	2.1	43.4		· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	24	-
6	+ -		S I 0 5	2.9	3.4	1.0	11.5	2.4			9	9	-		数小剝離痕のある剝片	11区	5.7	5.2	1.1	14.3	3.0		24	
7	磨		S I 0 5	(6.3)	(4.3)	(3.2)	(107.6)	_			9	9			数小剝離痕のある剝片	10区	6.8	5.6	0.8	16.4	5.1		24	
8	石	m	S I 0 5	(4.2)	(8.2)	(3.1)	(69.1)				9	9			数小剣離痕のある剝片	12区	4.5	3.1	1.0	8.5	1.8		24	-
9	石	Ш	S I 0 5	(4.2)	(9.4)	(2.6)	(61.1)	_			9	9	111	-	課 器		10.8	10.5	3.4	382.8	10.4	17 0.01000000000000000000000000000000000	24	
11	礫	器	SK02	10.8	10.4	2.5	246.5				10	9	11		半円状扁平打製石器		17.1	8.1	2.8	449.5	15.3		25	-
13	敬/	小剝離痕のある剝離	SK08	5.2	4.4	0.9	19.6	5.5		-	11	9	11		半円状扁平打製石器	<del></del>	16.6	9.1	2.9	499.9	15.7		25	
71	石	鏃	11区	(1.9)	1.3	0.2	(0.4)	_	***************************************		18	12	11		半円状扁平打製石器		15.7	10.1	2.4	522.5			25	
72	石	錐	10区	(3.9)	1.6	0.6	(2.6)				18	12	111	6 3	半円状扁平打製石器	6区	10.1	8.0	2.2	217.6			25	
73	石	匙	7区	6.8	3.1	0.6	11.0	3.3			18	12	11	7 3	半円状扁平打製石器	6区	18.3	10.0	4.3	901.5			26	
74	石	匙	表 採	10.0	2.6	1.4	29.7	7.3			18	12	11	8 1	擦 石	4 ⊠	18.2	8.1	6.5	979.6			26	
75	石	匙	13区	(3.3)	(2.9)	0.8	(7.2)	(1.7)			18	12	11	9 1	擦石	4区	18.9	6.4	5.1	772.2			26	-
76	篦	状 石 器	6区	6.5	3.1	1.1	23.1	2.5	a類		18	12	12	0 1	擦石	8区	18.6	9.2	5.9	1160.9	_		27	
77	箆	状 石 器	6区	7.8	2.8	1.2	30.7	1.4	a類		18	12	12	1 1	擦石	12区	(10.6)	(7.3)	(5.0)	525.9	T		27	
78	箆	状 石 器	12区	9.0	2.7	1.1	29.0	1.8	a類		18	12	12	2 [	凹石	5区	10.3	6.5	4.9	416.1			27	13
79	箆	状 石 器	2区	9.2	2.6	1.3	30.3	0.9	a類		18	12	12	3 [	凹石	6区	10.5	5.0	3.4	235.5			27	
80	箆	状 石 器	8区	8.1	4.5	2.0	69.6	3.0	a類		19	12	12	4 7	石 鍾	8区	14.6	10.3	2.9	488.6			28	
81	箆	状 石 器	11区	5.9	3.7	1.4	31.8	3.2	b類		19	12	12	5 7	石 鍾	13区	11.2	9.8	3.1	337.3			28	13
82	箆	状 石 器	12区	5.2	3.6	0.9	25.2	3.3	b類		19	12	12	6 7	石 鍾	11区	9.2	6.9	2.7	204.2		ACCOUNT OF THE PARTY OF THE PAR	28	
83	箆	状 石 器	1区	7.5	4.0	1.6	49.0	3.7	b類		19	12	12	7 7	石 鍾	13区	11.5	6.9	2.5	226.6			28	_
84	箆	状 石 器	13区	5.7	3.0	1.6	18.5	2.8	c類		19	12	12	8 7	石 鍾	8区	7.5	6.4	1.9	113.7			28	13
85	箆	状 石 器	13区	4.9	2.9	1.5	18.4	2.4	c類		19	12	12	9 1	暋 製 石 斧	4区	(4.7)	(4.4)	(2.8)	(53.2)			28	13
86	不	定形石器	13区	4.9	4.3	1.7	32.0	4.5			19	12	13	0 1	砥 石	2区	9.8	8.0	3.5	230.0	_		28	13
87	不	定 形 石 器	11区	3.9	3.1	0.7	7.2	3.2			19	12	13	1 7	E II	8区	15.1	25.0	6.1	2660.0	_		29	14
88	不	定形石器	10区	7.1	6.7	1.2	61.5	5.7			20	12	13	2 7	石 皿	4区	15.6	28.3	7.4	3600.0			29	14
89	不	定形石器	10区	4.9	3.5	0.7	11.0	2.9			20	12		3 7		8区	17.7	12.3	3.7	898.1			_	14
90	不	定形石器	10区	1.5	3.4	0.7	4.7	1.7			20	12	13	4 7	石 鍾	8区	17.0	7.9	2.6	431.7				14
91	不		13区	(5.9)	(2.7)	(0.7)	(11.4)	(5.3)			20	12	13	5 7	石 錘	8区	12.3	10.4	2.6	405.7				14
92			表 採	6.2	5.2	1.2	34.8	5.1			20	12	<b>→</b>	_	石 鍾	1	11.6	8.0	3.8	396.9				14
93			4区	7.6	5.6	2.0	58.4	4.7			20	12	4 1-	_	石 鍾		9.6	7.3	2.6	222.0			_	14
94		7	6区	4.6	2.9	0.9	8.0	4.0			21	12		8 7			9.8	8.4	2.2	171.8		凹石を転用	_	14
95	+	,	14区	4.2	4.4	1.2	15.5	2.7			21	12	13		石 鍾		9.9	8.8	2.6	220.3			<u> </u>	14
96			13区	4.2	3.5	0.7	10.0	3.7			21	12	4 1	0 7			7.5	9.2	2.4	218.5		打ち欠き1ヶ所のみ		14
97			12区	11.9	4.4	3.4	96.5	1.3			21	12	4 📙	_	石 鍾		8.9	8.0	2.4	157.4				14
98	+	次加工のある剝片	1区	5.6	2.7	1.2	20.9	_			21	12	14		石 鍾		9.1	5.8	1.9	148.9				14
99	-	次加工のある剝片	13区	4.9	3.7	2.8	48.9				21	12	14	_	石 鍾		8.6	7.5	2.7	216.2		打ち欠き1ヶ所のみ	1	14
100	+	次加工のある剝片	7区	7.5	3.6	1.8	53.2				21	12		_	石 錘		8.2	7.1	2.4	143.6				14
10:	+	次加工のある剝片	12区	10.4	4.0	2.4	78.9				22	12	_	_	石 鍾	+	(8.8)	(5.9)	(1.4)	(94.7)		欠損品	<del> -</del>	14
-	+	次加工のある剝片	11区	8.1	5.4	1.5	46.0				22	12			石 鍾		7.4	7.1	2.0	131.1			1	14
103	-	次加工のある剝片	10区	5.2	3.7	1.9	34.5				22	12	14		石 錘		7.1	7.4	1.7	94.1			+=	14
104	-	次加工のある剝片	13区	4.5	3.8	1.1	18.6				22	12	<b>→</b>	8 7		<del></del>	(6.0)	(9.0)	(2.6)	(119.1)		欠損品	1=	14
-	+	次加工のある剝片	5区	8.4	6.3	1.9	80.5				22	12	- Lune	9 7	石 鍾	8区	(5.3)	(7.3)	(2.3)	(80.7)		欠損品		14
100	石	核	13区	5.0	7.4	1.9	80.8	_			23	12	1											

第2表 石器観察表 (最大長・幅・厚および刃部長の単位はcm、重量の単位はg)

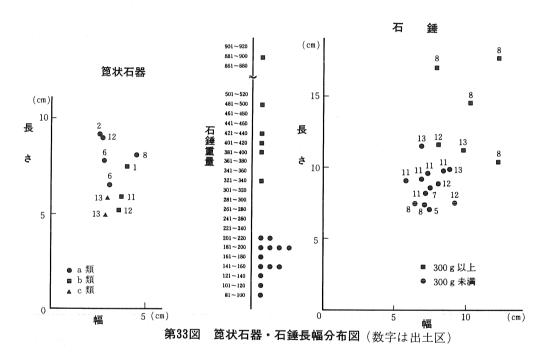


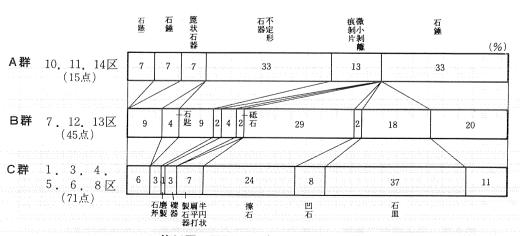


第31図 箆状石器・石錘出土分布図



第32図 石器組成図





第34図 区別石器 (Tool) 組成図

				剝片石器								礏		石	器			小	石	剝	片	石		上器 1	i d	(g)		時	時	T <sub>±</sub>
出土地点	i	量 4		石 鏃	石錐	篦状石器	石	不定形石器	のある剝片	製石	礫器	砥石	打製石器平	9 1		石皿	石錘	計	核	ある例は		2器類合計	前期	中期	後期		弥生	期判明小計	期不明	上器重量合計
	S I	0	5		(1)			(2)		(1)						(2)		(6)			11	(6) 17	218	7				225		225
	SK	0 :	2								(1)							(1)			1	(1)	43					43		43
遺	SK	0	6															0				0	9		T			9		9
樽	S K	. 0 :	8						(1)									(1)			2	(1)					11			
内	SN	0 4	4						1						-						2	3					11	11		11
	-	H			(1)			1	(1)		1				-	(2)		(8)				(8)						0		0
	1	区	+		1	(1)		2	1	1	1					2		(1)		(1)	14	(2)	270				11	288		288
	2	区				(1)						(1)			2			(2)		1		(2)		52				52	21	73
	3	区				1						1	(1)	1	1	3		7 (1)				7 (1)						0		0
	4	区						(1)			(1)		(1)	(2)		(1)		(6)				(6)		117				117	10	127
	5	区	+			:		1		(1)	1		1	9	(1)	7		(2)		(1)		(3)	28	234			17	279		279
遺	6	区	+			(2)		(1)		1			(2)	1	(1)	5	1	9 (6)		1	2	12 (6)		312			12	324	7	331
			+			2	(1)	1			1		2	3	1	10		20 (1)		(1)	5	25	52	1,229				1,281	3	1,284
	7	区	+			(1)	1				1	1	(1)	(1)		5 (1)	2	14 (6)		1	4	19 (6)	748	215			6	969	25	994
樽	8	区				1		2					1	4	. 1	3	7	17			12	29		493				493	6	499
	9	区	+	-	(1)			(3)	(1)					1		2		3	(1)	(1)	2	5 (7)						0	8	8
	10	区	-	1)	1	(1)		3	1								(1)	5	1	1	15	22	92					92		92
外	11	区	- 1	1		1 (2)		1	1					(1)			5	9		1	26	36	2,972		31			3,003	21	3,024
21	12	区	-	-		2	(1)	1 (3)	1		1			2	1		3	11	(1)	1 (3)	9	(12)	187	64				251	16	267
	13	区				2	1	3						7		3	4	20	1		20	44	344	233	92	7		676	15	691
	14	区	1					(1) 1										1			3	(1)	16					16		16
-	表	採	4				1	(1)						1			::. :.	3			12		256	154	37		10	457	49	506
		t		1	1	10	3	12	3	1	4	2	5	33		39	22	144	2	9	110		4,695	3,103	160	7	45	8,010	181	8,191
合		計		1)( 1	2)			(14) 14		(2) 2	(2) 5	(1) 2	(5) 5	(4) 33	(2) 8		- 1	(59) 152			124	(70) 287	4,965	3,110	160	7	56	8,298	181	8,479

第3表 出土遺物一覧表 (石器類の()内は実測図掲載数、土器重量は 9)

# 第5章 ま と め

今回の調査は道路改良(拡幅)に伴う緊急調査であったので、調査範囲は狭長で面積も小さく、五百刈田遺跡全体の中ではほんの一部を調査したにすぎない。したがって検出した遺構、遺物から得られる情報にも限界があり、調査結果をふまえて遺跡の性格を考えるにはある程度の推測が含まれざるを得ない。このような限界を認識しつつ以下では調査結果の若干の検討を行ってまとめとする。

## 1. 出土土器について

第 I 群土器第 7 類の S 字状連鎖撚糸文は大木 2 b 式にみられる文様で、第 1 類の不正撚糸文も大木 2 b 式までにみられる文様である。大木 1 式に多いループ文を施文した土器は 1 点も出土しておらず、第 3 類の非結束羽状縄文を施文する土器も図示した 4 点のみであること、大木 3 式にみられる竹管状工具等による刺突文、沈線文が施文される土器や、粘土紐を貼り付けた +器が 1 点も出土していないことなどから、第 I 群土器は大木 2 式土器であると考えられる。

出土地点別でみれば第 I 群土器は 7・10・11区に集中しており(第30図)、7区から出土した土器片には第 3 類や、第 1 類で 0 段多条の斜縄文を施文するものがある。一方11区からは第 7 類が出土している。また、第 2 類で 0 段多条のものや第 5 類は双方に共通している。このように、大木 2 b 式に特徴的な第 7 類がある一方、第 1 類や第 2 類の中に 0 段多条の原体を用いた斜縄文が混在することや、第 3 類、第 5 類も少量ながら含まれるということは大木 2 b 式よりも古い要素である。したがって、第 I 群土器は大木 2 式の中での時間幅をもった要素が含まれていると考えられる。しかし時間幅とはいっても大きな断絶は認め難く、大木 2 b 式期の連続した一連の生活痕跡の中で、土器が廃棄された時点の前後関係という意味に解釈しておきたい。

第II群土器は大木8b式土器であるが、大木8b式の新しい段階に顕著にみられる頚部無文帯を明瞭にもつものはなく、大木8b式の中でもやや大木8a式に近い時期のものと思われる。 第Ⅲ群土器は縄文後期と考えられる土器を一括した。第17図63・64は後期後葉の土器である。

第V群土器は第17図67・68が弥生時代前期、69・70は後期のものである。

#### 2. 出土石器と遺物出土分布について

第Ⅳ群土器は大洞C。式である。

石器類の出土総数は287点であるがそのうち2次加工のある剝片、石核、剝片を除いたToolは152点である(第32図)。以下では比較的多く出土した石錘について若干の特徴を述べる。

石錘は22点出土している。形態は楕円形または長方形に近い形態の礫の長軸方向の端部に打

ち欠きを加えたものがほとんどで、短軸方向に打ち欠きがあるのは2点のみである。重量は220g以下にまとまりがあり、それらと300g以上のものに大別される(第33図)。これらの出土区をみてみると、大型で重いものは8区に4点が集中し他に12区、13区で1点ずつ出土している(第31図)。小型で軽いものは11区で5点が集中し13区と8区で3点の他、12区と7区で2点、5区で1点出土している。この出土状況と時期別の土器の出土状況を比較すると、中期の大木8 b 式土器のみが出土した8区に大型のものが集中し、前期の土器のみが出土した11区に小型のものが集中している。また両方の土器が出土した12区、13区では石錘も大型と小型の両方が出土している。このことから俄かに断定はできないが重量が300gを越える大型の石錘は中期の大木8 b 式期に属するもので、重量が220g以下の小型の石錘は前期の大木2 b 式期のものであると推測される。ただし大木8 b 式土器のみが出土した5 区で300g以下の小型の石錘が出土しており、小型の石錘でも大木8 b 式期に属するものがある可能性は否定できない。次に1区~14区のうち前期と中期の土器が出土しなかった2 区と4 区を除く12の区毎に石器(Tool)の組成と土器との対応関係をみる。ただし、少量より出土しなかった後期・晩期・弥生土器、及び時期不明のものは除き出土土器の95%(重量比)を占める前期と中期の土器を対象とする。土器の出土量は重量比である。

前期の土器のみが出土した区は、 $10\cdot11\cdot14$ 区である(第30図)。逆に中期の土器のみが出土した区は $1\cdot3\cdot5\cdot8$  区である。また6 区は中期が96%、4 区では89%を占める。7 区は78%、12区は75%、13区は60%が前期である。そこで前期のみである $10\cdot11\cdot14$ 区(A群)、中期のみ、または9割以上が中期である $1\cdot3\cdot4\cdot5\cdot6\cdot8$ 区(C群)、その中間的で前期の比率が高いが中期も $2\sim4$ 割含まれる $7\cdot12\cdot13$ 区(B群)の3 グループに分けて、それぞれの群毎に石器(Tool)組成を比較したものが第34図である。第34図からは以下の点を指摘できる。

- ① 石鏃、石錐はA群のみに認められる。
- ② 箆状石器はどのグループにもほぼ一定に含まれる。
- ③ 不定形石器はA群では比率が高いが、B群・C群では低い。
- ④ 剝片石器はA群に多く約7割を占めるが、C群では1割以下となる。両者の混合している B群ではその中間的数値をとる。
- ⑤ 石錘はA群で最も多くC群では3分の1になる。B群はその中間的数値をとる。
- ⑥ 石皿はA群にはないがB群・C群では比率が高く、とくにC群は約4割を占める。
- ⑦ 擦石もA群にはないがB群・C群では比率が高い。
- ⑧ 凹石はA群にはなく、B群では比率が低いが、C群では比率が高い。
- ⑨ 半円状扁平打製石器はC群にのみ認められる。

A群(前期)に多く、C群(中期)に少ない器種は剝片石器と石錘である。逆に石錘以外の 礫石器はC群(中期)にあっては石器の主体を占める。このような特徴から前期と中期では石 器組成が明らかに異なっていると推定される。

このことは前期と中期の食料獲得手段の違いが反映しているためと思われる。すなわち前期 (大木2b式期)には石鏃を使用する狩猟や石錘を使用した淀川での漁撈を主とし、獲得した動物性の食料を解体し切り取るために石匙や頁岩性の剝片など鋭い刃部を有する道具が用いられたと考えられる。前期に剝片、石核(残核)、2次加工のある剝片(剝片石器の未製品)が多いのは剝片石器製作の過程で生じたためである。それに対して中期(大木8b式期)には擦る、敵くといった機能を有する礫石器が主体となっている。ここに食料獲得方法や調理方法の変化が認められ、動物性の肉類の他に採取活動によって得られる木の実等の植物性食料も重要な食料となっていたであろうことが推測される。ただし前期と同様に石錘が使用されており、動物性食料獲得の手段として漁撈は行われていたと考えられる。しかし大木2b式期の石錘とは異なって大きくて重い石錘を使用しており、漁法または目的とする魚種が前期とは異なっていたとも推測される。

#### 3. 淀川流域の縄文時代集落と食料について

本遺跡の西方約1.5kmにある上ノ山II遺跡は大木4式、5式期の集落跡であるが、出土石器の組成をみると狩猟、漁撈、採集ともに行っていたことが窺われる。遺跡の性格が異なるので単純な比較はできないが、本遺跡における大木2b式期と大木8b式期の対比からみればその中間的な石器の組成といえる。上ノ山II遺跡の石器組成にみられるように大木4式、5式期にはすでに主流となりつつあった採集による植物性食料の獲得と、擦りつぶすことが重要な要素として含まれる調理方法は大木2b式期の本遺跡においてはほとんど認められず、中期の大木8b式期において顕著である。これは大木2b式期に行われていた食料獲得方法と調理方法がしだいに変化し、大木4式、5式期を経て大木8b式期には大きく異なる方法で行われていたことを示すものである。この変化の要因の一つには縄文時代前期の気候変化に伴う植生や動物相の変化も考えられるが具体的なことはわからない。

本遺跡の調査によって、淀川流域においては縄文時代前期大木2b式期にはすでに竪穴住居跡に居住する生活が営まれていたことが明らかになった。この大木2b式期の生活を支えたものは、近くの山野における狩猟と淀川での漁撈によって得られる動物性の食料が主であったと推測される。上ノ山II遺跡を営んだ集団関係は、本遺跡のような上ノ山II遺跡に先行する集落とは無関係ではなく、むしろこのような集落が淀川流域の各地に営まれ、その中から生成したものと考えられる。

#### 引用参考文献。

- 相原淳一 「宮城県・山形県における早期から前期初頭にかけての土器編年について」『第4回縄文文化検討会シンポジウム 東北・北海道における縄文時代早期中葉から前期初頭にかけての土器編年について』 1989(平成元年)
- 秋田県教育委員会 「上ノ山II遺跡」『東北横断自動車道秋田線発掘調査報告書II-上ノ山I遺跡・ 館野遺跡・上ノ山II遺跡-上・下』 秋田県文化財調査報告書第166集 1988(昭和63年)
- 阿部明彦 【大木 2 b 式における「S字状連鎖撚糸文」の原体復元」『山形考古』第4巻第1号 1986(昭和61年)
- 岩手県教育委員会 「大地渡遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書ーWI-』 岩手県文化財調査報告書第56集 1981(昭和56年)
- 興野義一 「大木式土器理解のために(Ⅰ)~(Ⅵ)」『考古学ジャーナル』10・16・18・24・32・48号 1967~1970(昭和42~45年)
- 熊谷常正 「岩手県における縄文時代前期土器群の成立-条痕文系土器郡から羽状縄文土器群へ-」 『岩手県立博物館研究報告』第1号 1983(昭和58年)
- 熊谷常正 「北上川中流域における大木8 a 式土器」『岩手県立博物館研究報告』第7号 1989 (平成元年)
- 仙台市教育委員会 『昭和55年度三神峯遺跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第25集 1980(昭和55年)
- 田沢湖町教育委員会 『黒倉B遺跡第1次発掘調査報告書』 1985(昭和60年)
- 田沢湖町教育委員会 『黒倉B遺跡第2次発掘調査報告書』 1986(昭和61年)
- 富樫泰時 「東北地方」『縄文土器大成2-中期』 1981 (昭和56年)
- 宮城県教育委員会 『今熊野遺跡II』 宮城県文化財調査報告書第114集 1986(昭和61年)
- 武藤康弘 「小阿地遺跡 C 地区出土の縄文時代前期前半の遺物について」『秋田考古学』第37号 1981(昭和56年)
- 武藤康弘 「東北地方北部の縄文前期土器群の編年学的研究 表館式、早稲田第6類土器をめぐって | 『考古學雑誌』第74巻第2号 1988(昭和63年)
- 村山市 『村山市史 別巻一 原始・古代編』 1982(昭和57年)
- 盛岡市教育委員会 『柿ノ木平遺跡―昭和50・51年度発掘調査報告―』 1982(昭和57年)
- 盛岡市教育委員会 『柿ノ木平遺跡-昭和57年度発掘調査概報-』 1983(昭和58年)
- 盛岡市教育委員会 『柿ノ木平遺跡-昭和59年度発掘調査概報-』 1985(昭和60年)
- 盛岡市教育委員会 『大館遺跡群一昭和55年度発掘調査概報一』 1981(昭和56年)
- 盛岡市教育委員会 『大館遺跡群(大新町遺跡・大館町遺跡) 昭和58年度発掘調査概報 』 1984 (昭和59年)
- 山形県 『山形県史』資料11篇 考古資料 1977(昭和44年)



1 遺跡遠景 (東→西)

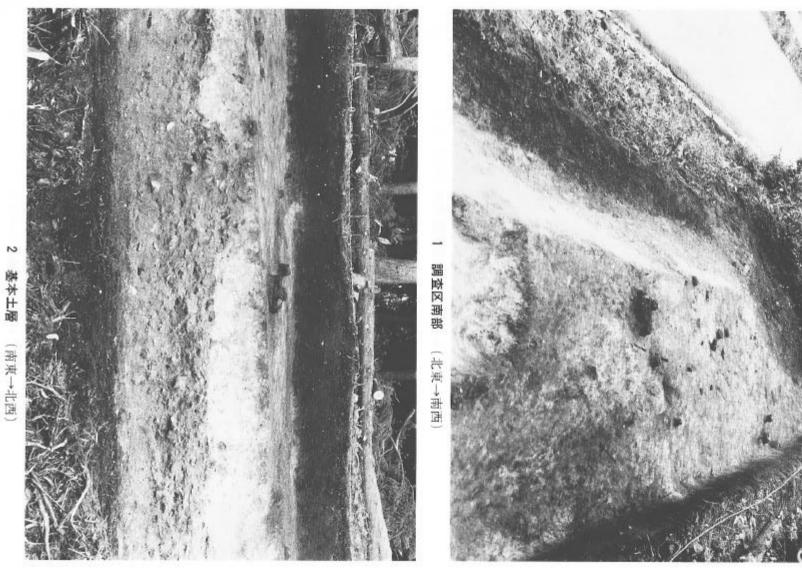


2 遺跡近景 (南→北)

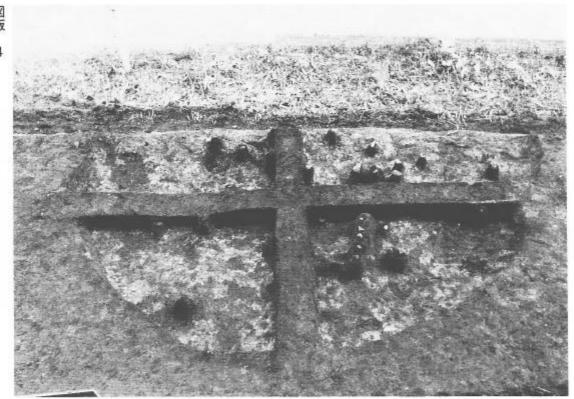




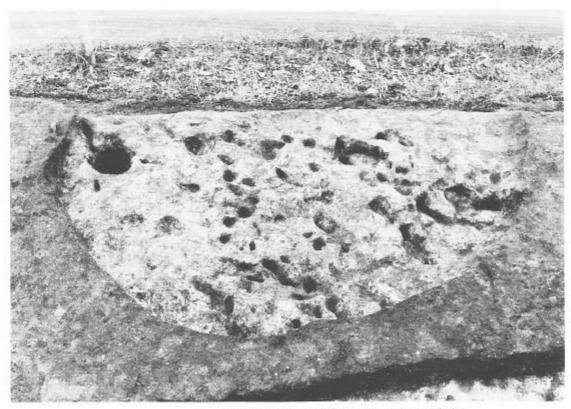
2 調査区全景 (北東→南西)



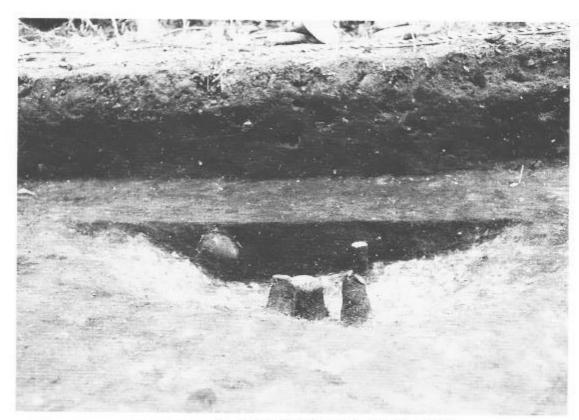
図版 ω



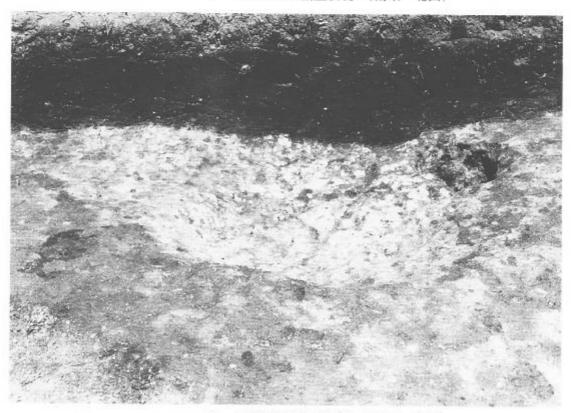
1 S I 05竪穴住居跡精査状況 (北西→南東)



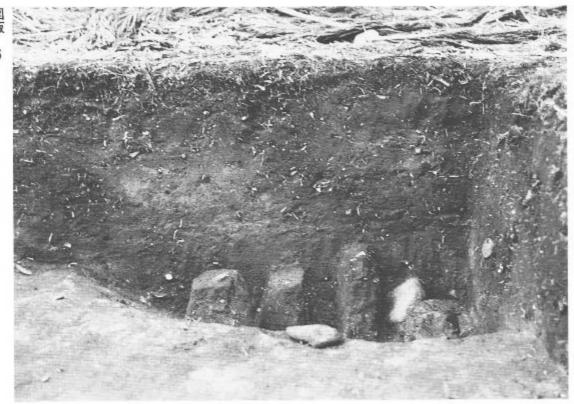
2 S I 05竪穴住居跡完掘状況 (北西→南東)



1 SK02土坑精査状況 (南東→北西)



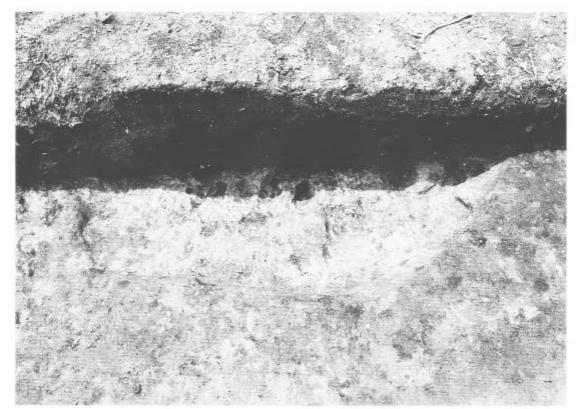
2 SK02土坑完掘状況 (南東→北西)



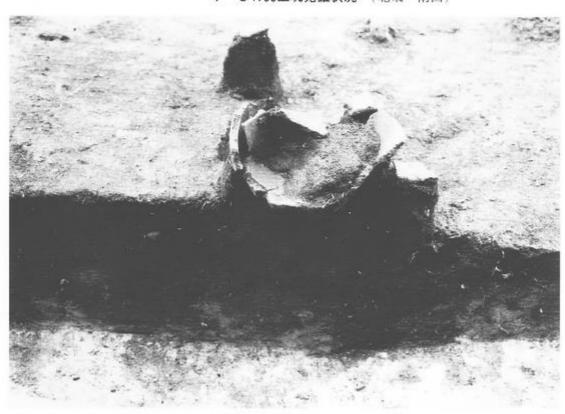
1 SK08土坑土層断面 (南東→北西)



2 SK08土坑完掘状況 (南東→北西)



1 SK06土坑完掘状況 (北東→南西)



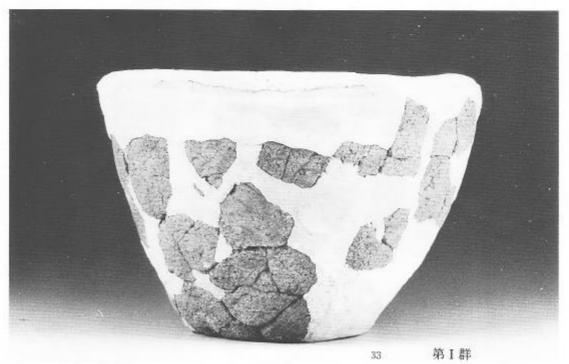
2 6区遺物出土状況 (北西→南東)

1 11区遺物出土状況 (北東→南西)

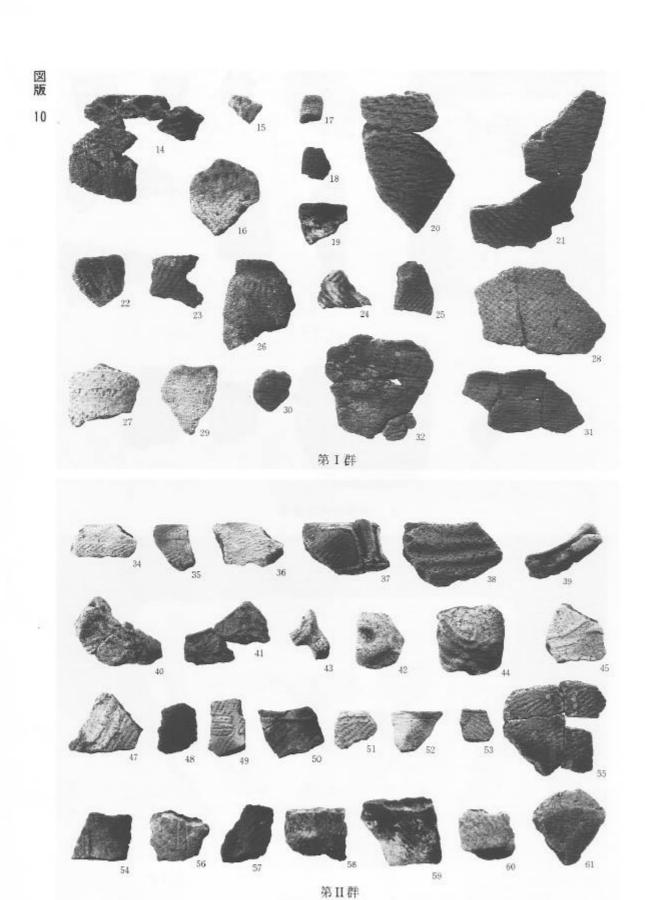


2 11区遺物出土状況 (東→西)



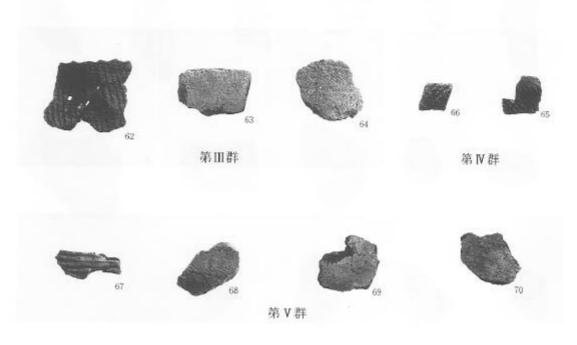


2 遺構外出土土器 (1)



遺構外出土土器 (2)

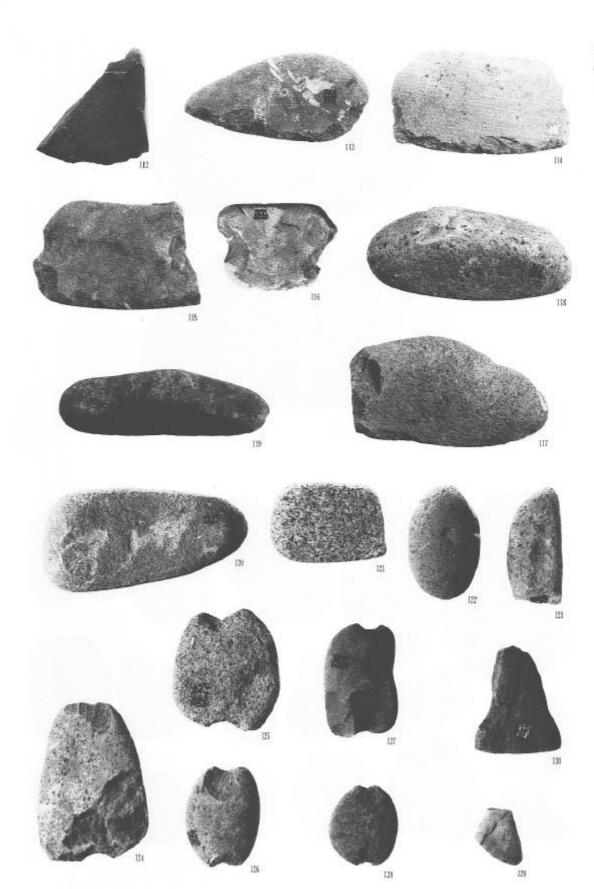




遺構外出土土器 (3)

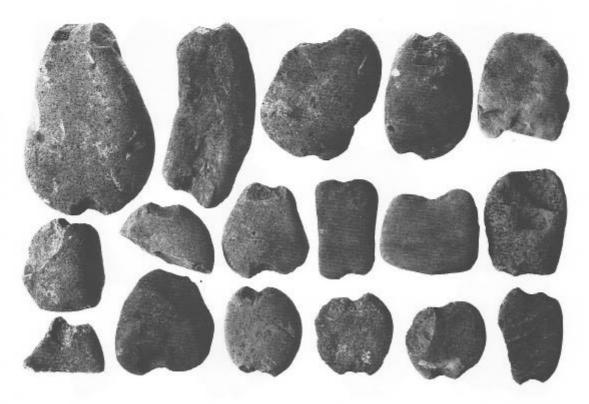


遺構外出土石器 (1)



遺構外出土石器 (2)





遺構外出土石器 (3)